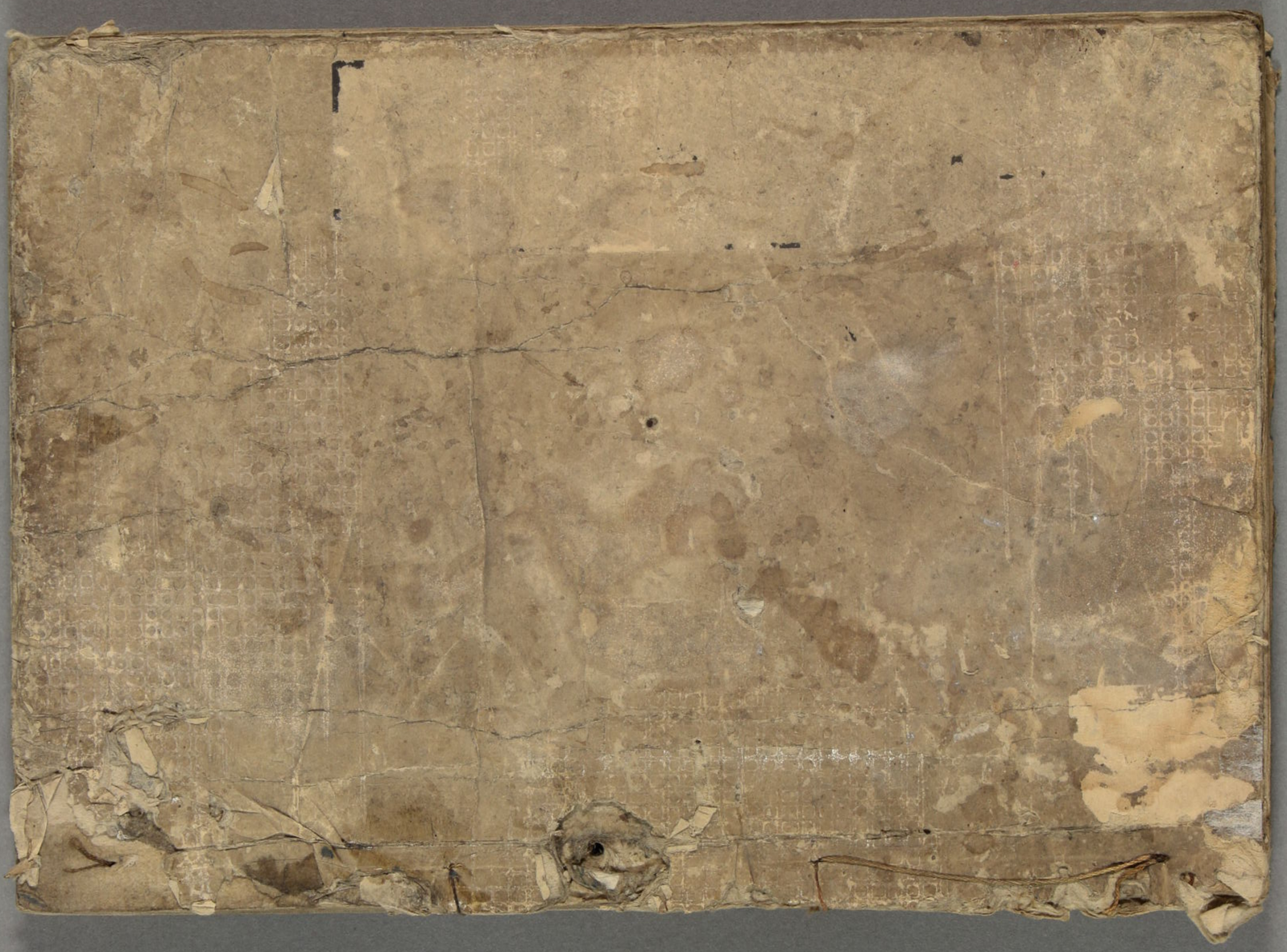
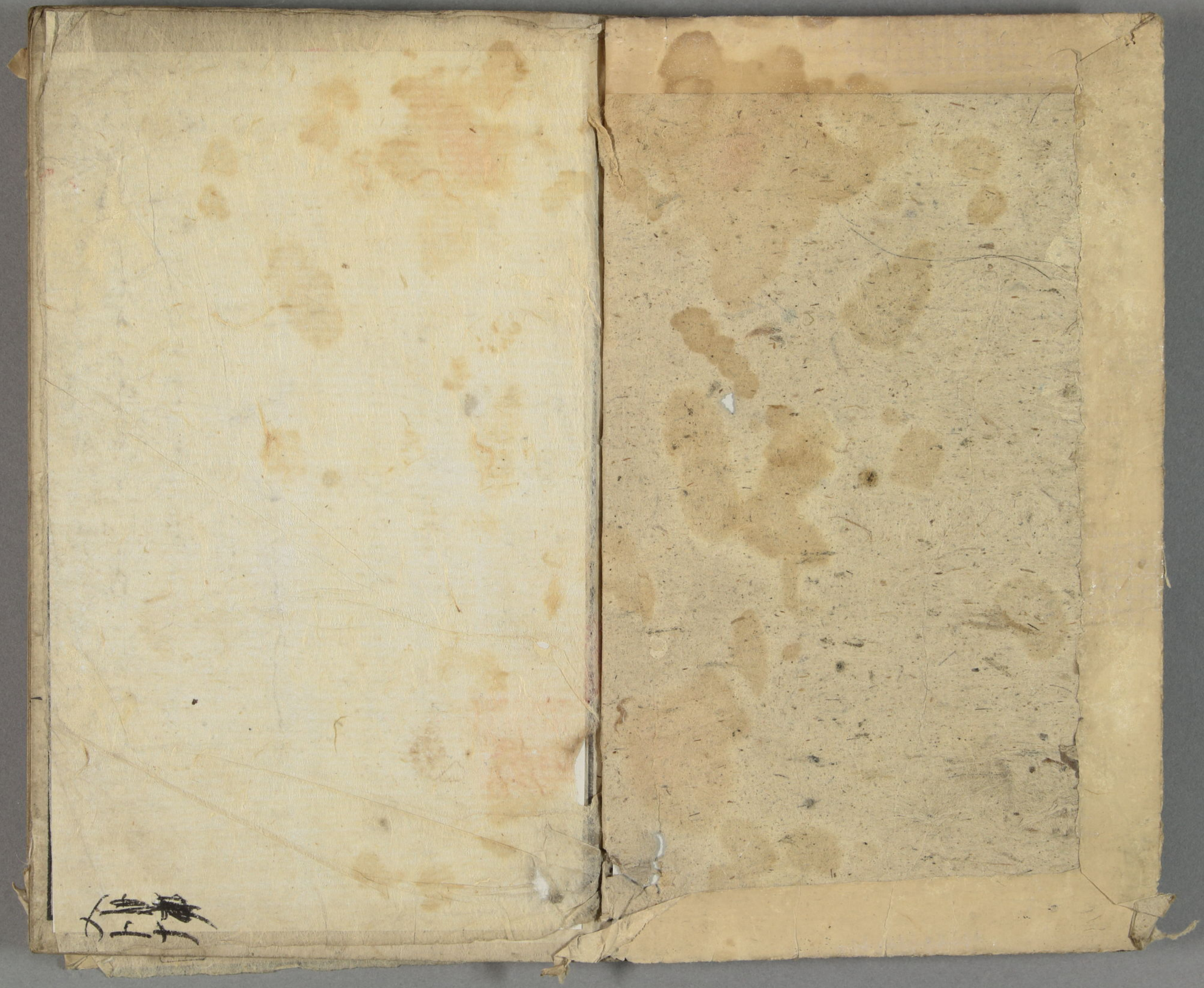




增山井四季之詞

春　青陽　青帝　陽春　蒼天　東君
　　韶光

正月

むつき　さつき　孟玉　初月　かさねの月　いとの月　上陽
孟春　大簇　端月　王春之月　左侍　初陽　陬月　月礼　夏正　孝序月　俳

正月ハ新除ゆゑむつきとも　さつきとも　それを畧してむつきとハいふ　立春乃後十五日雨水の節の初昏ゆ斗柄寅方をさす故ゆゑ　この月ともいふ　寅ハ夏の世の正月とて夏正とハいふ　十二律の大簇此月ゆ准れハ大簇ともいふ

元日

けさの春　きふの春　四方の春　さつき　日のさつき　さつの始　こつの始　年の始　ちとせの春　ちとせの春　ちとせ

あらう年　初てし　新しき年　上日　年以　雞旦　聖節　改旦

歳旦　年のはじめ　時のはじめ　月のはじめ　はじめ　三姫　三元　元三　元日

元日　年の朝　日の始　日の始　はじめ　三のはじめ　たといふ

世方拜　星をそなふ　付　はじめ　俳

元正の寅の時をはじめとして　吉方の山陵を

拜して年災を拂ひ宝祚を祈りまつる　義をもて行ふ　公事根源

紀氏次第に委　星をそなふといふ年中行事の条に入れり

当年の星　本命星をまつり　七返　はらふ　とり　入

在京の世俗星供とて　ふもをんなもをんなとり

ハガタメ

齒固　そなへ　銭餅　俳　大根　ふ　日　ゆづり葉　うぐひす　俳

齒固　日　はじめ　菜

世諺に云ふことわといひてそなへ　餅　ハ　ひとり　ハ　ひとり　あそ

各人ハ齒をもて命とする故　齒の字をそなへともよむ

齒固ハそなへをもちゐる　生涯の餅　後　ゆづり葉を

安倍ハ清女納言　松葉　ゆづり葉のゆをいふとそ　ゆづ

そなへのふまへ　あのゆを　てつりひさかる　一名をおそ　とそと

ふたり　蓬玉菜　或いはをおそ　菜といふ　とりうら白

ちゝのすゝ　又　あの　大根を用ふ　河海抄　元

をかゝ　一名をかゝ　大根といふ　菜といふ　蓬玉菜　ゆづり

侍藥を供ス　ゆづり子　屠蘇　白散　度瘴散

天皇屠蘇をきこしめす　菜子をもて小豆をえらびての万

しめてはてゝ　公事根源　菜子　菜子　童女

とて行うと年中行事の式合もあるべし八坐比礼振うとて
此比系のものやうなるとつるハ鶴と一鉢と屠蘇二鉢と白散
三鉢うり度摩教とて

椒柏酒（セウハクシユ） 事文 椒酒 日 椒鏘 書言

さるとも元日より事文類聚まで山椒の酒と

朝賀 朝拜 羮賀 羮瑞 付 小豆粥

新賀 新年 おそらく元日より新年天子を拜し下位るとう

とうや羮賀羮瑞も此時とうりとく小豆粥八粥を畧き給よ

いふくー年中行事に合よ侍り粥八百度とうく粥をと

とるも小豆粥八て屬上とうりちうとる事相承よと

元日帝會 諸司奏 七曜（シチヨウ）暦 氷様（ヒヤウヤウ） 脆赤（ハラカ） 園栖（クス）奏 ムネ屋

七曜暦と八日日火水木金土の七曜をあるくるものつまの暦と氷様とハ
さる年氷室よりとさめくる氷の厚さ薄さをこころみる奏してそあ
るーとて石瓦のうまをそまつるとく 脆赤の勢八鶏と云魚を
そうとて鏡餅とうてそうーを首八節会ちとう佳ー
りうやこまてのり 緒司奏とて元日節会のつのてまうとく
又園栖奏とて紙をうくひ節を吹るも此節会よ侍り意非
てをさ吉野高よ行幸の時国栖人参りて一夜酒をそまつり歌
うくひーを後も常よ来ぬーりるそまひとを云事相承

院拜礼（ラ） 一日 院系の人くの所ゝてお礼をうとを 拾芥抄

祇園きつりけの行事 佛 元日寅刻

元日の寅の一天よ祇園の社殿て松の木をきつりけよ新しき火を

きりて大ふく雑煮のあるよ可るゆゑ一説大晦日といへるハ非也

年徳乃神 俗 えと方棚 日

婆利賽女の神をえと方よりそひて銭をも雑煮ちと供へ奉るゆゑ

毘沙門のふくゝ経 俗

ふく夷 日 元孔子夷ちうくゝと賞をさめていそひ唐ゝ伝ふ

門の神棚 日 在家の毒ゝ棚をとうまへて神を奉ゝ表ハうゝけよ

所をそうゝ伝ふるゆゑ

門松 俗 ゝそ松 俗 かざり松 日 かさり竹 日

晴明翁盆内伝ふ胡且将来ふ墓の内ゝをちゝふとあれと世説

四芳ふ松ハ千年をちきゝう竹ハ万世を賞ぶ松ハ年始乃

祝ひふ用ゆゝ一条禅閤の吉伝作ふ伝へゝゆゝ

かざりうゝ 俗 ゝさりうゝ 日 大ゝさり 日 ゝさりの炭 日 箕箕ニアリ

土佐日記ゝこのうゝのうゝをとゝ伝ゝこれゝ出て神社のあをゝ

ちうゝうゝとゝハ門ゝゝゝゝ人ゝゝてハ悪ゝちるゝゝ

かけ鯛 俗 仔牧海老ゝさる 日

若水 つゝ井ひゝ 井岩水 井水桶 俗

吉年ハ生氣の方の井を若して蓋をして人ゝ汲をたして立春の

日主水司内蔵ゝてまつりハ和論ゝてゝをきゝてゝめゝ年中の

穢乱を除くとゝふ来文伝ゝちゝと年中行事秘抄ゝゝ

ゝをつゝ井ひゝゝゝともいふゝ若のゝゝめゝゝゝハ若水と云

ゝゝ又世説四若云ゝゝゝ井ゝ日ハ井若水とゝゝゝ

ゝゝゝゝを伝ゝ伝ゝゝゝと伝ゝゝゝ立春乃ゝゝ

生家より八年男といふもの元日の天より井の水を汲しをうけ
とて元水とよめるあて月ひ伝りしいはとをかけるをて八立春の
日うちれハそるまうてゝ時若をとゝ宮伝りへ是真法伝ちう
連歌より若水元日といとゝ俳諧ふハ月し

大ぶく 俳 元日より初てくまてる業を大福といひちうて月ちう月し

ゆう餅 俳 三ケ日よつまてる餅を雑煮ちとよ月ちし

雑煮いそふ 月 くんをいそふ月いとのくし月おそひくふ月ひうまを井房月
ひうまを表月ふとをし月あのもの月小ちうけし

菖蒲かけ 月 うけれ月かものとうをのくし田つくり初いそし
うくをうをうをうをうをかやくかうを乗ケ柿 梅ちうしおあり

抽ちう 耕子 揚ちうさう 野老 ちうをうをう 俳 生海苔をちう

江次第にも元日押鮎一杯とそう鮎八年魚として年の始より月ちう

年男 俳 ちうをうをと月ふくをうを月ふくさうを月ちう

とそ年玉ちうをう 年玉月 年始の物来礼おをそう

毬打 俳 仙きてう月ぶりく月玉 万はおよおきをうとうふをとと

仙中打ちうを これ英帝の亡ー後八ち蛍ちう眼のひくをを

准ちとちう 仙中打 并芝蘭四美

ちうつく 俳 されちうをうを月ちうはいを月 胡桃のを月 胡桃板月をとうは

こと蚊ちうをうをとさるまうしちうとうを秋の蛙蛉蚊をちふものちう

ちうはを沼をうんちうのうをちうてつくとはく 芝流四美

破魔弓 日 破ヶ矢 日 さきとて物をまもるてうの弓矢
みてこれを射てうひよ物員をいつむるものもうのむてあのを
うのまよひうや さうひ文 日 蒔ひ〜て 日 湯屋てめ 日
弓〜めの日 ちのあとてめ 日 花ちてめ 日
きてもめ 日 きぬきて知ひてひて日の内吉日を撰てあるし
式法みハ髮結(キツヒハシ)して舟ともうさうて宗てあ作るうりともいて
こう拍の庫鈴 日 俳諧 叔氣(シウキ) 和香 元旦の雑のまくし
神宴 立春の日乃長うさ 暦ひう化 松てて 俳
吉年 今年 ふるとし 七ひの年 俳 ふるとし
筆試る 書てめ 俳 右書 日 紙毫 日 うてひてめ 日
千壽(センジユ)寿(ヒサイ)宴 乃宴示是諧て第のまめひといて宴者修時よて

歩弱 俳 元旦のいらくまて年ものし 寿延 日
おさうり 日 元日ふるあを世俗てひひちくへをり いはつむ 日
いはふる 日 正月の寝起をいて せち振廻 日 水うけ祝 日
けさう文書 日 桃符 桃板 桃梗 仙木 書言 鬱墨(ウツボク) 弁茶(ベン)
是ハそろこのちてまは桃の木の札は弁茶鬱墨の二弁の形を絵て
書て元日よりて門ふ悪や防〜事 作りこれを桃符とも桃梗
とも桃板仙木ちくもいて事文
畫鶏貼戸(テウス)ニ 鞏素(ナハ) 元日のるし
そもかう国ふ多くう鶏を門戸の上ふ却文を上ふ戸のなくを
うけ札をくはうまはしてさきめ八百鬼ろて世家附記ふて
ぬ(ジヨ)願(ゲン) そらてふ祈る商人清胡麻ふ必祝とて小豆を色ぬうり

彼高人の事を語り給ひし面影をしのびて記
出でうとて高人迯げ去ぬ其ハ糞壊の中より迯入てせ後ろ姿を
ちらぬ千歳の後人元日よりて縄より人形をうけて糞の中より
ちけて今ぬ孔といふものをきり事文

蓬灰を飛ぶ　立春の日蓬の茎の灰を律の管にいれておけハ
蓬ぬ孔いでる時千灰おつる事文

春盤　生菜　そろそろの李部といふ人大根芹ちりを菜
盤として立春の日ハ始めをうちちもーとちりて春
鍬生菜を春盤と号ずといふ事文

蓼蘇をいでる　絲蘇ともも
蓼も蘇を作りて立春の日いでくとし案時記

六

初子の日　子日のあそび　小松引　子日の松　初子きよのむそ支
是ハ若菜を家持この千ちよ世ぬ帝とハ著といふ若ぬ小松を
取そへて子日初子日こそ取をそなをむるものと神中物ぬ云事

若菜　初子ぬ取せんさ　ちりれさそへ　芹　薺　ごぎやう
ちーろ　ちぬ仏体の外　菜つむ　菜つむ　若菜　若菜指　千代水菜　若菜　若玉
ふくろ　排　ふくろ　ふくろ　日
首八ぬ菜を上の子日ぬ内蔵寮ぬ内膳司ぬ禁中ぬ出るとし
或八十二種併ぬるぬもーく　公事松原ぬ行千年ぬ首
蕨葵茎等も首千八立春七日ぬ後ぬ　ちぬ仏を行仏
行ぬ日の晩ぬ　ちぬ　ちぬ　ちぬ　ちぬ仏を盤ぬのせて帝王乃
ちぬ日本の国ぬ　ちぬ　ぬを行ぬ

神寅条 俗 ふと柏ノ一日

上の寅の日鞠をまるるもしせまりとふるふくよ強石をいれて

上ようりて絶えたけて雲ようをふとおろしとうこまるまうて伝る

宴宮の寺のて稲宴 俗 二月弦指行之

御杖 御地法杖 正月上の御日ようこの木を五尺寸つよ

切て二束三束よゆひてかしやけよまるをき杖とつふたり一公事

柏原ようを原氏抽使ようハ御つうとと御杖と知ようりちう

年中の悪鬼を追し条所ようり内裏ようハまるとと三光院殿

以後しくこの世ようが義ようり御杖とて立歌ようとうかくはるハ一尺

あまりの白けりうう事をひけのうをまいて俱利伽羅剣乃

くくよ伝ようる掃ようはが神をれ松をよ御杖のうをとふるを

二月の大饗 二月し二ようとい東方中ようの事し王に伝下二ようよ

ようりて牧祝をて答ようをくるし ようる柏原

朝覲行幸 二月し是ハ天ようの年始よ上皇并母后のようる行幸

ようるし ようる柏原 紅覲の宮礼都よを

臨時客 二月し是ハ摂政関白家よ事ようる右大臣以下の上達部を

柏ようて柏ひ柏ふりのようし定まりるの勢ようてもあるねハ後

時のようりし年中行事 原氏抽使ようハ ようんじようとあり

以柏ようをて ようくて楽器をふりして郢曲乃

人も芳柏ようをうふとい

三ケ日　うゝゝの速秋　三日よりあり

千癒万病膏　延喜式

元日は家ハ三ケ日きゝゝわしてはて三日又はてゝゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

松の内　世話

[illegible]日　改[illegible]日

履[illegible]　元日より人をかゝる[illegible]　書言故事

[illegible]新[illegible]　元日正旦より[illegible]てくをかゝる[illegible]　書言

叙位　五日或六日位[illegible]の年労を養一位[illegible]より叙[illegible]

白馬節會　七日あをむまのせち　[illegible]の養　白馬あをむま

とゝ[illegible]ハ[illegible]ハ[illegible]ハとて正月七日あをむまを見ハ

年中の邪気を去とゝ[illegible]文[illegible]

[illegible]

とゝ[illegible]天[illegible]

[illegible]長さ七尺[illegible]七尺

[illegible]　年中行事

七日正月　世話

[illegible]の[illegible]ハ[illegible]日とて[illegible]

作ゝ前楚歳時記[illegible]平月七日俗七種の菜を羹[illegible]ハ

人万病[illegible]　人日　七日ゝ　霊辰　書言

人を帳に貼[illegible]　年文　正月一日を鶏ゝ二日ハ狗三日ハ猪四日ハ羊

五日ハ牛六日ハ馬七日ハ人日とゝ[illegible]人ハ家内の霊[illegible]故霊辰[illegible]

[illegible]一日に鶏を[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]唐[illegible]人を帳に貼[illegible]

茅嶋川祭事 他 七日吉祥天の祭事あり

侍御會 八日 大極殿にて十四日より七日夜勝王經を讀せらるべし 五事標

祈雨をいのり奉らるべし

十二言読法 八日 福直人 徒弟学

是もまた七日の間行なわれ今年金剛界ちれ八所年八所

異年にはかなりし修せらる後七日の法修法とハいへるべし高三位ハ

禁中よあり

大元師法 八日 法師者にて七日これを行なる 五事 所ノ字ヲヨミス

女叙位 八日 女の位階を叙せらるべし内侍司の被なり

東四位子として松茸ヨリ行事の初のひめまうちきと号る

こゝに八三つゆを用らるとなり三ゆハ天ゆ地ゆ中ゆ也

り女毎年ト文をつくりて五位のうちの名を給ふとも有り

紀路ト季俊とハ一名をおぼえ給ふ

女王禄を給ふ 日月参議解史ト兼明門のうち輕の社にて女

王子禄を給ふるべし女王禄の女ノ字ヨミサルベし

常陸常乃祭事 十日 寺院國廉鳴祭の日女のけさう人

あまたある時に男の文とを布の帯に手あつりて祭あり

ゆ手帯ようつくり帯をひんて女のけ帯のやうにて

それにちに手帯のわしの男と叙しくちるとも 五名祭

夷祭 十日 西の京にて祭 人々集り侍らし 他に今日大坂の今宮の夷のやしろも

縣召の除目 十日より十三日にて二ケ日ゝとあるべハ田舎のるし

不図の人をもして任官を授けられハそうよ名分ゝ名誉法国乃
受領を任ずるのとなさんしの戸文ゝ多相原よゝ

十四 廉金の内論儀 十四日法成寺の拾殿ゝおこなひ向者
論所ちとせ兼ゝ論義ハ内侍義とゝ

男踏歌 十四日の夜し ちれゝ宣ゝ成人ゝ法しの
錦とて赤ゝ白ゝ黒ゝとゝいゝさしのゝ踏ゝ踏ゝの
ゝ金ゝ男ゝ女踏ゝ八十五日のゝ中ゝ乃ゝ
おゝゝ京中の男女のゝ中ゝ
ゝ衣冠をつゝて弟をゝ
ゝ踏ゝ踏ゝと八中とゝ
緒をゝ

らゝ三月ゝ男踏ゝ
ゝゝとゝゝ
踏ゝ踏ゝ組をゝ
十四日ゝ蹴 世俗 綱曳 俳 大綱を引合て綱頭ゝ付て赤ゝ
三絲打 俳 左多長 爆竹 ゝゝ
ゝ左絲打ハ
絲あゝをゝ
ゝゝとゝ
ゝあつめて
結ゝ
ゝゝ

其ての後も野槌にて爆竹ハむかし山臊といふものの人を
犯しなやますをおどさんとて作りしを元日のならはし事文
類聚にハ出たり然れども此国にてハ十五日の晩にぞなすことなり
かゝる時ハ十五日の夕 内書にハ十八日とし

上元(ジヤウゲン)日 十五日の夜を云也 灯楼を点することあり

竈新(ミカハキ) 十五日 これハ百貫のごとく新をもてまつりて家内背に
をさへあへるとぞや 云々

かゆの木 同日 かゆつゑ これを以て女の腰を打戯れし
是を打れたるものハ男子を産と云 極めて家にハかゆの
木と云り 縷にハかゆ杖と云 あつ方のさくまをつりあけと
いふ物にて人を打ることなり

小豆粥いはふ 俳 同日 あつき粥を煮て今日天狗を祭れハ年中の
邪気を除くと云り 五事

辛盤の俗粥(ラン) 同日 河内国辛盤の神社子粥を以て年中の田畑の
吉凶を相するとぞ

鄕子(カシラ)以の神事 同 十六日 伊勢国山田にあるなり十五日十六日 大
どんど松をたちふるなどあり

賭弓(ノリユミ) 十八日 是ハ天子弓場殿にて弓を叡覧ましますなり左近衛右
近衛兵衛府の舎人ともに射侍りて負けたるハ罰酒をかうむりひ
勝の方の人ハ舞楽を奏す大将迎衛の笠と乃八幸果て乃ち
大将射手の賭を賜ふこれをかうむるとぞ

厄神参り 俳 十九日 攝民將來 是ハ八坂の厄神のまつり

まうてくさん將来の札をもらあてゆるす　祈代は年次天王
護兵の時を切れいて始めの孫永く災難を免るべしと祈る
祈る故護兵將来の孫とつふれをうけもるる　厄神八年次天王
ゆゆ

鼻足の祓　俗　二十日　今年の縁をうらうえ　今五月
二十日ぐんご　同　世信今日を廿日正月とそう
寒餅を繋　同　天霊　そうこは東方俗　宵廿日の糸こて
英餅を結て屋の上まおろう　そを天霊とハつふとも　拾き祝
伊都岐祭　下亥日　官幣を近代所祭ふこと　於坂
相撲　廿一日　松壽殿こて行ふる文人部を組り　詩を作て出第こて
藤せうあてうゆとる　吉田吉凶　俗　十九日　女節分

外記の政始　吉凶をえらふふ記ハ恒例作付の所をうり行ふ友ふる故正
月ふまの南年の祝を行ひ始ふる
情忌　俗　廿五日　法祝上人の忌日こて十四日をうけ廿七日知恵院こて法事
福壽ふさ　同　元日年とも元日年忌候とし　東拙ふふくを
氷こふる　氷ふふくこふりのひ乃　おそくる　俗　氷ひふふ　ゆふけ
ふふ　氷よ　月令立春の後五日の候
ちこふる　ちる　おふる　ちは水　ちきゆる　ちのこえ　ちの雪
ちる　俗　ちふふ　ちふ　ちふ　ちふ　ちふ　ちふ　ちふ　ちふ
雨水の節　宵の中し　下そえ　武伝二月とふ　位月令　本萌動ハ
雨水の節の来ふ

[illegible] 俗 蕗花は 蟲偏草二十四番の第四より雨水節の一候よりあり

蕗菜 俗 水いも菜は 乃菜は 根白菜 芹し

芋菜 新菜 紗菜 ひたしたへ或い二月九月 蕨子の芋茎 俗

[illegible]は ふきのとうは ふきのとうは

梅 この花 春月菜 白い菜 蕾 香花足年は 白梅 [illegible] 紙むき

福貴梅 行幸梅 仁徳梅 好文木 蕾宿梅 蕾の黄ハとたうの

拾遺集よりあり

柳 [illegible] [illegible] 川柳 [illegible]足年 川[illegible]柳 川[illegible]年 [illegible]玉

玉柳 [illegible]柳 門の柳 閑明寺にあり 国[illegible]柳 俗 [illegible]ぶ柳は

[illegible]柳は 柳髪は 柳梅は

蕾 白い蕾 金[illegible]蕾 俗 紙[illegible]は [illegible]は 蕾乃秀は

蕾筆 松[illegible]より 但[illegible] [illegible]つくりて味[illegible]

蕾乃事より [illegible] 蕾鶯 蕾蕾 詩

俗保姫 三月より成る 長栄は [illegible]は [illegible]

水[illegible] [illegible] 三月より成る [illegible] [illegible]る 俗 [illegible]は [illegible]

[illegible]ず [illegible]

春蕾嘲

[illegible]月衣 梅の花衣 蕾衣 蕾袖 柳のきぬ

松乃芯 [illegible] [illegible] [illegible]松 十[illegible]の芯

[illegible] 三月より成る 八[illegible] [illegible]の衣 [illegible]の袖 [illegible]のあし 蕾乃笹

[illegible]ず 横[illegible] 一[illegible] [illegible]の海 [illegible]より雪[illegible]

貞徳云 [illegible]の衣ハ衣[illegible]より [illegible]の[illegible]

編み似たるといふるゆし　蓬の海そひまの抽根の条　猪くりをむを
長ふよりは長ハのをうまそをめうをむとふるゆし
すゝぜ　山椒乃皮　野芹をゝゝゝゝ　百ヶ寺
長のゑ　ゑのゑし　儲ゑのけるゆし
蓬乃胴　長し　貞固云仙境をいふし　洗の法所をもゆし

二月　きさらぎ　梅月　花王　小茶生月　日　仲春　夾鐘　此月

今月　陽中　正月いのとうちりをけ月さえうつて衣をあらく
きるんまそきさらぎまといふし　奚義抄　を帝ハ太皐その神ハ
勾芒　律夾鐘よおくうとそうり　半文
中和節　二月一日し　驚蟄節　二月初氣し

初午　初の午日いちうよ年ゆうゆし　東福寺せんかう同日　俗
水間寺初午祭　和泉国し　本号紀世まとゝや　本所ちゝ系　初午を丘し
歓生子　そうゝよ二月一日よ長化代長よ百穀瓜ゑの菓種をのてゝうをうう
糠奠　釈菜　二月の上の丁の日大学寮ゝそ孔子ゆ十哲の彩位をうう
ゆうし　礼記の王制よ菜を釈幣を奠て先師を礼をとゝゆ
釈奠ゝも釈菜ともいう　訓よハをゝうつとせむとゝゆ年中ゆ
二月八月ゑ度ゆ日を釈奠という　長し
春日祭　上ノ申日　先来ノ日を和中ゆ將勅使よう南日ハ内侍
所ゆ出車ゆ上ノ帰矣も今日所ふゝ　ゆ
大原野祭　上ノ卯日大ゝ長月祭と月しとゝや　先も長日明神し
祈年祭　四日　式以下三千百廿二座の神をおゝやけよ祭せ

行ひ奉をいのりを行ふ七ーしこと云ふ

祇園清八講　八月　於芥舟寺

別見　十月　公方御方御記史ちと冠を品をかぶりて改変して

行ちとちすしら信ヒ下の蔵経ものを撰て武門者の二者ちう

ひをおて寄をを上ちめーしをて墓参儀をとるゆ列見と

いふとそ云ふ　吉野の俳人ちう　二月一日　於比良の八講を仕比良まうて行く

薪の能　俗　面松よりう七日ちう出まて　二月堂のおこない　俗

面松よりうを吸ちう松をちるゆを一日ちう出ちとく

遺教経　仏涅槃よ入給ふんとて此経を説給ふ中世流四苦よる

九月ちう十五日ちと北聖釈迦尊ちて此経を刻像し釈迦の名号を

唱ふるし給ひ給ふ千年釈迦念仏といふこれを此仏人始ちこと

仏乃別見　二月の別　ちうし仏　涅槃像　俗　涅槃会　日　吉野ちて　日

濃州柱杭　俗　十五日　奥福寺常楽会　日日　於芥舟

積塔　十六日　或い石塔とうちう社乃の法事

春ちう乃節　二月の中し　朧月夜　社日　春ちのお修ち

近支戌日ち或支春の法華五の戌日ち是ちうこと五穀の祈を祭る

月ちしまる言祭事ちうと　つちの此社日ちうといふ

清水井酒　社日　酒をのの八月を酒をちうと清ちうと云ふて海藻祭事ち五

社前雨　社の祈舊水を食をちる故社日ち八月雨ふをちう是社前乃

雨といふし提要藻ちを社の祈い后土ちも白杉氏ちう共工氏の

ふく水土を子けつる始ち社ちとちう木を植て社主ちとちう夏

松殿云ハ柏周云ハ栗と称れ左 王者五色の土を封して社とし
候を建と禹貢注にあり

国宗寺家勝会 十九日より五ヶ日延久五年に始之云々 於芥抄

天王寺聖霊会 廿二日聖徳太子の忌日にて天王寺にて法事あり
あり後日伶人の舞あり

北野御忌日 廿五日天満宮の御忌日なれハ吉祥院にて八講
あり菅原氏の人々行ふところ

季御読経 戊三月中旬にて大般若を行ハ給ふ日

二月灸 俳 同出らその日灸すの二八月両度とるを去しとる乃
季をとるつるり後といふ字をいて秋と

彼岸 日 時正 これも書て後の彼岸ハ秋にも称して乃ころ所

臺子樹あり二月に花開きて七日七夜にして落秋八月に実なる梵
天帝釈善見宮にて千万年の経世界の善人悪人の名を
志るその時に此彼岸七日の間善事を修するとぞ称樹葉の記に在

うぐひす穴を出る 俳 鷹化して鳩となる 月令

継尾の鷹 白尾の鷹 鳥獣云 背材に色鷹の尾を指のきて
ちらしとて白き羽を継人まろの鷹色の尾を雪と見て山へ
ゆるらんおもしろくとをし

鳥の巣 鳥の古巣

鳥の嘴 雉子 きじ 野雉 漢の呂后の諱を雉とよぶ此諱を
いけて千世にハ雉を野鶏とよぶ

きじ鳥 鳴鳥 ときしらず さまよふ山 雉鷹 春の山

くりかへ雉の声をむすんハ春え 貞徳云 春ハ雲より

雉のうく和をすおよまゆよみてうるを雉子ゆきをとる雉子ゆきをとる
鶉ふかりともいふしきこしたとい鶉のちゝぬやうをいふ
燕 玄鳥 つばくろ 同巣る 同巣 鳥巣 鳥名 或い別し
鶯 丁の名 丁の名 丁の名 北ゆう 所を結ひても来し
雪雀 ひうり雀 俗 雪雀のちゝを結て来て来てうし ひうりの子 俗
うて 俗 琴引 こゝ名 日 雀の子 日巣 蜂の巣 俗
蝶 於蝶 笑蝶 俗 蝶〻 日 ちけものこふ 日 蛇 日
蛙 人る 俗 ちゝ人る 日 ちゝ人る 日 人る子 日 井蛙 日
地出出る 俗 うけちふの子 そゆ いとゆ 糸桜 柳糸
猫ひる 俗 猫の書 日 ちゝあひる 日
初鮒 俗 鮒膳 日 ちゝこ 日 鮫蝟 日 ちゝこ 日 田ゝ 日

ちゝつゝちゝう 日 初ひれひう 日 自然ま 始電春分の来の候く
八重の梅 紅梅 御中梅 俗 庭梅 日 枝梅 日 笑梅 日
苔を待 初苔 初桜 糸桜 彼岸桜 俗 ちゝ人 日 ちゝ桜 日
ちゝ桜 日 玉桜 ちゝ玉桜 俗 ちひう桜 日
ちゝ化 日 二階桜 日 ちゝ桜 谷門のとよめり
真御 云桜 八重を結ひて八重く 俗 今家ちゝてもものいとく八重く
ちゝ木 俗 苗代 日 苗代 日 焼野 山を焼 ちゝを焼
焼野のちゝき ちゝの野 萩のやけちゝう
畑ゝく ちゝ畑 畑ちゝ 田ちゝく 田ちゝく 苗代
水口祭 真御 云苗代ち水ちゝ 水ちゝ 水ちゝ
種蒔く 麻まく うと 俗 くい 日

けらし　日　羊ちえ　土の筆　杉菜　仮　防風

あるつ万　仙中物こ万ゑ　あらうえし仁

茅の万茶　菊の万茶　藤万茶　ゆう茶

蕨　早蕨　くま蕨　他　蕨手　日　裳菫　別称　弟垣川西前ちゃう

角つ和ゆ　芦錐　ちんつく　他　つくんぼ　日　筋　日　ちゃ　蕗　日

菅　日　川ちさ　日　沢ちさ　日　海雲　日　いのちり　日　紙ふり　日　武者　日

蓋海菜云　春の初いりちりの中より夏の初八年ちとこれ乃ちゆ考えてこれを

尺ちゃ春八ちく出ちり蓋ゆ出ちゆ

三月　弥生　姜月　桃月　春を待つ月　季春　仲姑　車文　姑洗　於芥

病月　春ちりを荷出ちゆ　茅の花月　弥生れいゆをひ月といふ多をやをひ

とハいふく　俳中姑ともいふ　俗中姑ともいふ　春律　春加月　花形月云

巳の日のちとり人　上巳　三月上の巳日水をそそぎ人へて疫病をのそく

ちゃとちゆ足周の代ちて一ちを魏ちり後巳三月三日を用て

巳日を初ちる事文　別称　添紅　周年　思魏文とふ　足く

須磨の浦　足い光源氏流ち左迁の時三月一日巳の日陰陽師ち

初をてみて化ち行て毎ち人形を作りて流ちり彼物作ちる

曲水の宴　春を流ち　めちりめちのあり　日本紀

ちゃ春ちちてちりちゆ者八王ちちと法おそて詩をつくり

盃ちれちとゆ法溝水ち盃をうえて文人ちを盃ちとこ云ち

桃花の節　三日　桃の酒　他　菜餅　日　蓬餅　日　鶯合せ　日　いい紙　移ひ　日

柳鶯　日　今日桃酒を酒ちひ　ちゆめハ百物を除ち　新ちゆを酒ちと

本草に云く 於谷村 事文類聚に桃花生玉洞二柳絮満金溝といふ詩

句を上巳のうたに出せしもその故にてもも桃を飲ひ柳のくさを

手向けるや 〔異〕解に昔周幽王淫乱にて群臣愁苦しける故曲水の宴り

或人業様を幽王にたとへしを王の味をめでて宗廟に奉りへしと

のたまひて是より政改りて世治りしとし其節句に定りしゆ

鼻息云 〔鶏〕合は三月三日にある故事に姫といふ従者に従ひたる節会にても

出たり 余案るにこれもあるなるべし六朝にて起りたるとふ唐の

明皇清明の節に闘鶏をもてあそび給ひても鶏坊を

かまへ童子五百人を置て是を飼を給ひけり事文類聚に載たり

世説田芸衡も今日是を戯ふ此好みぞと侍りしが朱雀院

天暦元年三月四日に闘鶏十番ありし由或記にみえたり先師も

鶏合雉子も出されけれは八番を揃て科あるべし 〔鳥〕は一羽あるひにそ陸

ちかづけあそばねはかくそれは雑なるべし 清世物語にも元日にも鶏の

闘ふもひいれずなりし世侍るには今日にかぎらずあそばれける侍卿

あひしらひあるは此比の俗に任せて今日の事にもなれへしやとて新

續犬筑波集にもみえけるての侍し

青草をふむ 本の俗上巳に士女相戯るをいふ又三月三日上踏

青鞋履といふは盧公范鐸飾儀にあり四様活法にいふ人日に蜀人相戯事ありと

清竹を北斗にささげまつる 三日 其は北山異景なるものに仕せりしを

そなして北辰に供そなへたるとふやみかはり清殿に北斗をまつりて此事を祭して

三度清净あそばして宗々柏源なりとみえたり

祭師さるの寂勝会 七日 此寺は武蔵国の浅草也 毎年七月七日定勝

王經を授けられ給ふ　日

石清水行幸　中午日南都へ下れり　先中辰日試楽あり

舞人竹葉の色にて所作ありて仁壽殿の東の方に

ならべて陪従近衛の召人来たりて和琴を

南日に大臣以下うさの面を仮舞人の持たるにて五位の

まうけのあり是い年の時門ながれの時八幡に祈りて

成就の報賽のことに行はるべきなり　その相伝

結茶祭　是去年形ふ比疫神ふ禁じてこれを

神祇官にてをこなはれ　年

定食　冬至より夏日清涼の節の三日をとりおこなひ

とり是いたりてより今ふ推といふ賢人ありけるを一日して三日の経

火を断ちて魏武帝ハ北方の定國より来りて堀をこんとして

老食を法をもつて国華井州の刺史と称して時をまもる次をもて民の命を

そこなふ事推とて賢者の事をあつ〳〵井州の民ハ都て温

食をもつてうるおすことなれとも法をもて食を断ちをわ

粥の粥　老食の用ひ中都中記みえ　粟一の餘　年中四月

青精飯　年文　青飯飯　是ハ老食に相相の法を正て給を断れ

老ちうもとこれハ陽気をもつてもく道家にて青精乾石飯とそうしてを

もち飢飯ともいふ

鍬鍛乃戯　半仙のことにあれ　是ハ年文にのこるこの場を来りかけ

栄を立て士女ことに上に坐し立て三絃を引うそして有ふ事今

唐の天宝年中に宮中に食に供鍬鍛の戯をもちひ給ふ

帝半仙の戯とよくよまりと天宝遺事ニ有

清明乃節　三月の節也　楡柳の火を賜ふ　是ハ唐の舎ニ
於て火をきりてを清明の節ニ楡柳の火を取て帝より近臣ニ賜ふ
ことし昔もろこしのふるきことを書言故事ニも出しけり

住吉乃汐干　仝　三日　土佐の海ニ硯石をとる　同日　汐干ニ取る

石山祭　同日　粟津祭　同日　一乗寺祭　同日　五日又六日ニ旅行

泉涌寺乃開山忌　同八日　水尾祭　同九日　高雄法華会　同十日

やすらひ花　同日　高尾ハ法華会ましますそことハふつるをかくちやほと
此ノ社ハ紫野ニ有テ高尾山ゟあるりつとあまり紅やまれふとつところ
ちりを去来ゟ戯ニ有

吉野乃花式　仝　十一日

礼拝講　仝　十二三日叡山於八王寺拝殿行　比良祭　仝　十五日

祇園一切経会　十五日　於林　壬生念仏　仝　十四日より廿四日迄狂言有之
猿　桶取　蟷螂　あさいな　湯きりなとの事あり

勧学会　十五日　康保年中ニ大内記慶保胤紀伝の儒をとりかはさん
とて文道先生の学徒をあつめて三月九月の十五日ニ寄行ひ始まりし
作り念仏を為之号二故山ニ正田と紀闘名の作詩もこれを朗詠
勧学院ハ三条の北壬生の西ニ在る藤氏の学生抱学有
しことし所也近世四条大宮の西ニ有

嵯峨の大念仏　十五日　狂言あり　千本念仏　此ハ嵯峨の釈迦堂ニ在ると

清水祭　十八日　江戸　満朝試（ミミハヅイ）　十九日　さる大般開眼ニて法名を試る也

御影供（エイク）　廿一日　弘法大師入定の日ナレハ東寺ニ法ア高尾の神護寺
仁和寺ちるとより始の例の事ある日也

稲荷の神出　中卯日　次藤森神祭日ニ始ル也

順の業八　春大業ニ入ル　田蔵化して鶉と成　月令　清明第五候

穀雨乃節　三月中ノ　萍生ス　月令　穀雨第一候

春ノ日　蓬化ス　変近　変鶉　熊　おひふ　ひちな

春の雨　ゆく春　春の別り　春の名残　春を惜む　春の深　三月名

春ふる雨　春そ降る　春よ降れ　春に負ける　春に従ふ

燕　ツバメ　ねりつ　三月日　かとりの巣

ちふと春　雪と入る　春ふる　能の詩の句　春帰る

春ふる人　負ける三月の来る　諸春の言葉　春ふる人　春は

のびりや　負ける　負ける　新乃のり　春は

桜網　ちらぬ　柳　桜貝　桜魚

春雨　小紙　小紙　小紙　葉子　彩葉

桃

姫桃　緋桃　毛桃の花　万葉集　桃の花酒　碧桃　桃林

桃の矢　桃の実　桃の花酒　桃の実　桃の花

三千年に一度開く桃　桃の実　桃の花

姫桃は塩川法命百首の内

山桜　花桜　八重桜　遅桜　庭桜　かまくら

くさくら　をそ桜　桜人　桜田　桜戸　桜り　太桜

雪舟桜　吉野桜　人丸桜　滝桜　布引桜

ちりぬる桜　春雨桜　紙屋桜　西行桜　西山桜　法師桜　名残

いせきり　桃　きりの雲　日　江戸桜　日　渭桜　日　ちりぬる　塩ちり　日

曹賢象　日　太山府君　日　緋桜　日　稚児　日　白い桜　日　糸桜　日

ちりぬる　日　ちりぬる桜　日　夏桜　日　深雪　ちりぬる尾　日

太山ざくらハ俳諧のすゝ也 夏山桜 おもふ名なき 日
外草 日 異草 日 名もし草 日
家桜ハ人家に咲桜也 桜の名木ニあるは山桜、唐桜も有 山に咲
庭に咲をいふを名木の中ニ多くつらハあしなとあり
桜戸ハ桜ある家の戸也 桜田ハ桜を植たる所也 桜狩ハ
桜を尋ねあるくるをいふも 桜の比待わたるをもいふ
さくらやつ埋る方やさきひ太山ふかん法師なとの尾なとの名ニハなる
桜とり白ひろしのあくしひありて知らつしとぞ師説なし
又庭桜あるをそれて咲たるそも多くとる 比傘
花乃錦 花の雲 花乃笠 花の文 花乃滝
花の浪 これをさてらしるなし 春ニ花の雲 花の滝ハきこし
ふぶかるをいふ 花乃粋 花に付るも 花鳥 花と共に飛ぶ
又花と花ともいふ 花乃笑(エミ) 花の貞 花の白ひ 香也
花の姿 花の帰(リン)俳 花もちなる これ花の上をいふ
花園 花島 俳 花乃宿 花の露 花の鹿 俳 これハ花に来る鹿をいふ
花乃姿 花乃なせ 花のもち 花心 人の上なとをいふ詞也
花の影 貞徳云人の心も花いふ色見えいふは心のあいふむ也 詞乃
花ハうて気色と花人の事なるて花ハふを以て 花むなるなる
あるハ何のおもと見えて花て花むすもなる也
花衣 花の衣 花の袂 花乃袖 花の上をいふに有て衣装をいひ見て
いふ詞也 花皿 花をさしこ 花桶 俳 花生 日 花入 日 花筒 日
花瓶 これハ花を入る器なり

花車 花笠 花筏 佻 花乃浮橋 日 花かつら 花かつら 佻 花乃盃
ことさらに花車をとゞむる也 此中に花かつらハ桜草也 此花車と
貞室乃説に 鄙化とも花車とはいふとぞ
花乃車 佻 花つかひ 日 花むしろ 日 花の宴 花見酒 佻
花軍 佻 唐の長安の都の士女春時に闘花して斉ちかふを花軍といふ也
花莚 花纐 花のおきまくら 花莚といふ 花の縁 花乃都
花をふらし 四條の河原にも香の名をいふハ花をもてあそぶと
貞室云 花乃躍 佻 花見てをどるを...師説之
花くもり 佻 花乃花 日 花 日 それ乃縁 日
花のゆかり 花のおもかげ 花守

梨花 山なしの花 なしのつぶて 唐梨 梨の花
海棠 佻 ねぶれる花 辛夷(コブシ) 山あらゝぎ
躑躅 岩つゝじ 蝶つゝじ 白つゝじ 清しらき 蓮華躑躅 佻 雲仙 日
深山つゝじ 紅つゝじ 佻 ふじのつゝじ 日 加茂山より 花つゝじ 堀川より
山吹 欵冬 貞徳云 山吹をいふ化のとをいふと知る名葉て咲の
山吹とは額縁も古今の山吹を花見ていへば山吹の花
木瓜(ボケ)乃花 ぼけ 佻 沈丁花(ヂンチヤウゲ) 日 木蓮華(モクレンゲ) 日 赤南花(ミヤウナンシケ) 日
蘇枋(スハウ)の花 日 小米乃花 日 小手毬 日 小梅乃花 日
庭ざくら 日 唐桜のはなにあたる 馬酔木(アセビ)花 杏(アンズ)の花 佻
ゆすらの花 日 擬宝(ギボ)花 日 柿の花 日 くちなしの花 日
李(スモモ)の花 日 藤 藤なみ 藤の枝 藤かつら 藤つる 佻 藤こぶ 日

[illegible] 俤 [illegible] 日 [illegible] 草 つゆくさ [illegible]

物犯 俤 [illegible] 日 [illegible] 春菊 日

新菜 日 [illegible] 日 [illegible] 日 [illegible] 日

かうらい菊 日

馬藺 日 又云 [illegible] 日 [illegible] 日

丁子菜 日 [illegible] 日 [illegible] 日

仙茎菜 日 [illegible] 日 [illegible] 日

三葉芹 日 三月菜 日 三月大根 日 [illegible] 日

あさつき 日 一説二月とする [illegible] 三月芹 [illegible]

[illegible] 三月ふきの [illegible] 山 [illegible]

[illegible] 衣 表白裏赤 [illegible] 花と桃花説 山吹衣 表黄と裏黄 日

うつ山吹 表黄 表紅 日 清し衣 表黄と裏黄

夏 朱明 昊天

四月 [illegible] 日 [illegible] 得多月 日 [illegible] 月 日 正陽之月 [illegible]

巳月 首夏 [illegible] 中呂 [illegible] 余月 [illegible]

[illegible] 律中呂 [illegible]

更衣 一日 白雪 [illegible]

[illegible] 扇 [illegible] 殿 [illegible]

[illegible] 織 日 [illegible] 日

孟夏の旬 一日 [illegible] 拜 [illegible] 二日 延喜式

[illegible] 二数の後 [illegible] 拜

とて奥をうるし事

以地蔵祭（シクヽ） 一日 或説に十日長谷人形云つゝ月の頃神の祭とハ考へられ

数万と稲を載て出の所うるし

稲荷の祭 同日 此神ハ弘法大師東寺造営の時稲を荷ひて来り現して

法師の姿約をしゝ東寺建立成就して先ず天八幡宮の神を

伏り給ひて稲荷を勧約の時命くゝ出現一社八皆乃紙

芝居をとらへて東寺を仕事をして今の稲荷

山を結庵ありて今の山旅廿日八此日粉を進ずるを市者ハ

今ゝ法旅と云る所ゝ東寺等ゝ縁起あり

アラヽとして 又稲荷山を結庵の時地主として祝れ一翁ゝ面容を

大師ゝ模ゝ彫て神事の表紙ゝ祭礼ゝ奥ゝ加ゝ也る

おゝて足し或説ハ猿田彦と云て是猿神の化ゝ人ゝ神ゝ

大神の祭（オホヒノ） 十日 ゝ神の祭 山科祭 上巳日 平野祭 上申日

雲尾祭（オホワ） 上申日 ゝ八酉日 當麻祭 上申日 大和ゝ 杜本祭 同日 渉国ゝ

當宗祭（ヘリムヲ） 上酉日 ハ内ゝ 十日 勅使ゝ 杜本南宗近ゝ夜一人の役者社ゝ

梅の宮祭 同日 摂氏の祖神ゝ 水屋祭 他 南北春日ゝ 三月 四月 五月

疫神祭 祇園祭 廿日 此方社大和ゝ 左阿八大島神 祇園八牛頭神ゝ

抽水の祓を除ゝ疫神の祈ゝ公ゝ祭ゝ

山鳥日の供 他 三日 或八月ゝ 八朔祭 他 辰の日ゝ

擬階の奏 七日 ゝ八二月の列人の時の成選の短冊を式奏二者ゝ

ゝてまゝを左ゝ奏ゝ

灌仏 八日 仏生会 抒花会 仏の誕生 他 五香水 浴仏

[illegible]

[illegible]

戒壇祭 八月 山門ノ

山門祭 仏 日月天王ノ祭ト童似トスル 多賀祭 仏 上巳 近江

近江八幡祭 中午 平安天神祭 十日 [illegible]

伊勢神宮祭 十四日 麻績連トヲフ氏人麻ヲウテ数和衣ヲ織テ

神明ヨリ[illegible]ヲツフク 五事

月読祭 中申日 山王祭ト 大宮聖真子 二宮八王子 客人十禅師 三宮

以上七社ノ神輿船ニ乗ジテ海ヲ渡ル

[illegible]祭 中酉 [illegible]形 [illegible] 上賀茂 [illegible] 下賀茂別雷

[illegible]祭ト [illegible]形ヲ [illegible]人ノ夢枕ノ[illegible]ヲ

[illegible]ノ[illegible]ヲ [illegible]ヲ [illegible]ヲ [illegible]

中山祭 日日 [illegible]

吉田祭 十子日 吉田春日ノ事ト中納言山蔭ノ建立ト

岡崎ノ[illegible]祭 中申 主人ハ宗申ニテ地下衆上人前駆ヲ [illegible] 唐橋ヲ

[illegible]ヲ [illegible]ヲ [illegible]ヲ [illegible]ヲ [illegible]ヲ [illegible]ヲ 東ヲ [illegible] 水ヲ

[illegible] 事

三枝祭 [illegible]川祭ヲ [illegible]ヲ [illegible]ヲ [illegible]ヲ

神[illegible]ヲ [illegible]ヲ [illegible]ヲ [illegible]ヲ [illegible]ヲ [illegible]ヲ

千因子 仏 十二日 [illegible]子ハ神ヲ童ノ [illegible]ヲ千[illegible]

[illegible]祭 日中 [illegible]ヲ

久世祭 中巳 清水地主祭 九日 白月明神祭 中辰

當麻法事 十四日 中將姫ノ居日ニ [illegible]ヲ [illegible]ヲ

土筆 十五日 天王寺にて 同 光琴 十七日 菅原 中午 江戸

花鳥 正月 京野 大師の法会を取り行ふ 神祭 長崎 榊

梅天 三月 京 小満節 四月中

和清乃天 文選 源氏 和歌 清 麦乃秋 掃

麥蛾 月令小満節の来也 青麥 俳 菜花 日

ちるこの年 廿日年 名所 牡丹 俳 義経 日 花王 日 ちるこの

ちるこの年 俳 文化年 以傘 杜若 ちるこの 菜の花

蓼花 二月年 葵ちる 俳 ちるこの

ちる蓼 俳 こちらひ 玉南蛮 一八 桃

ちやう 日 薔薇 日 けしの花 日 ちるこの 花車 日

鴨足草 日 山吹 日 菜刀 日 菜刀年 日

柏ちる 夏 法 又一説 秋 ちるこの 卯の花 長崎 卯木

第柏 卯木 俳 ちる桐 ちる桐 ちるこの 菜の花

ちるこの 菜 蔓ちる 蔓木 ちるこの 利樹 桜 木の下 ちるこの

青梅 実の落葉 桐乃花 俳 てまりのこの 日

義人年 俳 法 ちるこの

元来 ちる 法 日 所 李 仙師 法 ちるこの

樹 新の葉 日 ちるこの 日 ちるこの 日 ちるこの 日

山吹の花 日 ちるこの 日 薇 日 ちるこの 日

桜乃実 日 竹のこ ちるこの 俳

岩 紅葉 日 蓼 日 利根 菜乃花 日 ちる根 日

郭公 号 光 ちるこの 山 ちるこの

くまく 叶の名 子規 不如帰 郭公 俗 かんこどり

ぬん多 日 藤原雄 日 きりぎりす 多日 蝙蝠 日 こうもり

麻乃袋角 日 ほやゆくさしのはるくつるのあとゝゝしいてゝゝとゝ

落ちくる蛍 長雪 俗 飯能 俗 蛍の雀 日

蜂振虫 日 蚊 蚊柱 蚊帳 俗 蚊屋の初ものの日

夏の ちくさし 隆 夏の衣 雅夜 明 ちくさよ 夜

一夏 夏籠 夏 入 俳 安居 形如 静 梅 日 夏 要 期 此 住 日 居

行 釈氏要覧 三 夏 文行をうる

五月 さつき 月 さ月 月 さつき月 仲夏 薙賓 皐月

五月雨を異して さつき さつき 律 薙賓 よりて 五月の名 とた

賀茂の足揚 俗 一日 競馬 多 絵 松葉祭 日 四日

新菖蒲 三日 菖蒲の湯 八日 菖蒲 俗 菖蒲 俗 菖蒲 俗 菖蒲 俗 菖蒲 俗 菖蒲 俗 菖蒲 俗 菖蒲 俗 菖蒲 俗

六府 菖蒲の二十を南殿の階の東西に立て時の品を折てはしめ 松葉

内裏司供早風 山城の法園 さつき を 松葉

五月の節會 菖蒲の さつき 机 天子 紫宸殿 出御 して 宴

今を行 紫宸殿 菖蒲 を 縫 菖蒲の さつき を 典薬 さつき

菖蒲の つ さつき さつき さつき

端午乃節 端五 もろ さつき 端午の日 五月八

午の日 さつき 端午 さつき もろ さつき もろ さつき の手 さつき

菖蒲 菖蒲根 菖蒲刀 菖蒲の さつき 菖蒲 さつき 菖蒲 さつき 菖蒲

菖蒲 昆明の百節の菖蒲の根茎 菖蒲 菖蒲 菖蒲 菖蒲 菖蒲 菖蒲

[illegible]

菖蒲の葉を入れ或は菖蒲湯に入れる事は本
朝又大祓礼日令にとふまつり作り 世説四云
予今年令大祓礼おいは蘭湯のもとに作り[illegible]
遊て年〻作る[illegible]
[illegible]
永き根とふ[illegible]乃事

クスダマ
第一玉 くすりの玉 さつきのひ 長令纖 綾令纖 錦令纖 條達 五彩絲
就麻ふ五月まおこるなくきふ業事を五文の糸を懸てひちとくとハ
[illegible]
[illegible]
[illegible]

今日萬端を[illegible]粽をさくまふいおくあとをあるる

伊勢物語に作るよ[illegible]
[illegible]
[illegible]五芝を時るかよ時無縫乃ゝ[illegible]
[illegible]

クスリヒ
第日 五月ゐるを[illegible] 菖蒲 [illegible]
ちまき [illegible]

かしわちまき 角粽 角粽 錐粽 茨粽 粉粽 丸子粽
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

うたりをもつて角桑れ子粽ちとのはりくゑ年文れ裏ゑゆ

けつりけり曽（カツト 俗）　ゆ一蒙古の夷　晋國をおそれんとをしてゆ

紙等を弱い物しを古俗をて甲冑を第一名具を個へ雑旗を

をて作るとゆかの蒙古を今俗唐くゆこて年とゆ作り

艾人（ヒカイ ジン）　蘭　幸丈　天師を多く　日

人形を作りて門戸のうちけ作りを艾人とも蘭人とも云り又

天師とて人形を長やあのひけを作りとして門戸のうちに

あり我国も端午人形を彩の上門のおちとまりくるり出れ

るゆ又天師を高らかて北の人の夷るゆ云ゆ出雲紙を

絵をとりて夷作りを云て門戸のあるそおくるり出れ

作ん　艾虎（ガイコ）をいくつくり　これも磨ゆ年て虎を作り

長豆なとゆ蒙古の年て小虎を作りをの年ゆ作りて

頭ゆつくりて邪鬼を除るゆ作り　歳時記

彩園（フンダン）を射る　滴彩園（テキサイエンタン）　水園　白園　唐の玄宗ゆ端午ゆ彩園

ゆを作りて今俗乃中ゆ動てゆ角ゆ矢ををけて射あて是ゆ

今ゆ年と天宝年ゆ年ゆ又水園を作り白園と名つけ魂へ

五色をそ〳〵人鬼茶鼠ちの形を作り滴彩園と名つけて端午ゆ

祭ゆ年ゆ射作りあり

桃印符（トウイン フ）　五日　赤霊符（セキレイフ）　日日　名ともるかとりのきゆ篆文の

符を書て屏風山帳扉ちとゆ和て西氣をやゆるゆをとゆ

桃木とゆ又抱朴子ゆ端午ゆ赤霊符を作て陰鬼を去るゆ作り　年文

百薬をたつそ　元ゆ端午ゆ名ゆ年ゆ年ゆ作りて酒肴を

あつらふるものもとらう　荊楚歳時記

菖蒲をおびる　五日　艾をとりてゆきまきまるる大哉礼ラ
あつらえ　今の世ラ菖蒲の湯のおりらるる

粢の義　粢のおりかたち　事文

端午ハ粢の義を百官ラ賜へるる漢史ラ有りしく

鵠鷄の舌を去　零陵記ハ鵠鷄を刻て五月ラ食ラ舌の尖を
さるといふ　事文

競渡　競渡ハ舟を河を渡るを速を爭
競車　競車　水馬
ふる　屈原五月五日汨羅ニ沉て死人を救ひ舟檝を
そそこを救ふ　今日競渡の為ハ
後世ちらう南方蠻の国の人ハ舟を車とハ檝を馬とする

此舟を競車水馬といふ　事文

騎射　馬弓　年中行事合云五月五日菖蒲酒を飲むいのりを
市場をしこれをとらふる

左近の馬場　右の馬場の馬ハ六日ニ乾ひをの
日といふ三日ハ左の馬場ハ五日ハ左の
五日ハ右の馬ハ五日ハ左の馬ハ五日ハ左の
馬場ハ左の日といふ　世日近衛の陣の前の庭ニ引て
馬場ハ左の日ハ右の日といふ　馬場ハ左の
馬ハ正日ハ左の日ハ右の日ハ左の
馬ハ正日ハ左の日ハ右の日ハ左の

京地　似　世説四月ハ五日ハ菖蒲ハ
京地　世説四月ハ五日ハ菖蒲ハ
うの騎射ハ左の騎射ハ左の

神水　端午時雨竹の葉にたまりてある水し　本草

菖蒲の鬚（トボヒムヤ）　五月五日人々あるいはこれを

つくりて子々孫々にいたるまでも堺をゆひ結屋の木あり下に結

屋を設

ちまきの起　五月俗人粽を取ておいたるのちにて霊

気を避る事歟本草に云ふ松葉粽にも粽の

ちまきにふるまひ五月五日おこなふ人々も

片男女ともに端午に粽を結ふ今をんな方にも

つくるのちに

菊酒　五月　菊の酒酒を造る等あり人々歌を賞を天王と祇

園の酒結祭　仙　十二月　近江坂本にて

五月に無日　芝居日　貞徳云村上天皇の時風流

はじめ日をもちゐる日に風流はじめ日大内に改らし又毒日あれい行る

六月に無日　東大寺　奥福寺　延暦寺　園城寺　四天王の方々の僧の中に

勢力の学問ある僧を撰びて法師とし法師を清涼殿

にて講をさせる　つねに学問僧の席といふ事

世にもし年中行事に今よりの月のこのうちにもあらんかし

鼎給（シントウ）　芝居狂言茂に茶屋を結ひて茶中の候宴小酒を飲

宮法祭　仙　八月　きんぐりといふものをいたしてあるし

今宮祭　九月今宮の十五日紫野にて松をいふ和おそびし

室の明神祭　仙　十二月

五月に無日　芝居日　貞徳云村上天皇の時風流

はじめ日をもちゐる日に風流はじめ日大内に改らし又毒日あれい行る

六月に無日　東大寺　奥福寺　延暦寺　園城寺　四天王の方々の僧の中に

勢力の学問ある僧を撰びて法師とし法師を清涼殿

にて講をさせる　つねに学問僧の席といふ事

世にもし年中行事に今よりの月のこのうちにもあらんかし

鼎給（シントウ）　芝居狂言茂に茶屋を結ひて茶中の候宴小酒を飲

撿挑医仕事ありてこれをいく

佳吉の比田植 俗 十八月 おぞらげ 日 同月

山田の苗田扇 日 芒種の節 五月節 夏至 六月中

ひらつよ雨 ひらつよ

梅の雨 黴雨 俗 墜梁花穴 体の国よりて五月の節うり者この壬

のはうり物面とふよりて 幸業綱目よりて又美梅雨ともいう

虎ヶ洞の雨 俗 十八月 此月芒種祓城うれうる日也 虎の御前

無佛をしらよりまふ法をかくりふし

紙園の比奥洗 俗 三月

半夏生 五月の中うり土日うし先日金より作る五作ふ此日つくる

まこもの野菜を不食といふ

蟬の初鳴 日金より夏至の節より

常夏草 俗 日金より夏至の節より拉草より新芽

高こ草 川 蘭草 蘭草の苗 蘭草を刈 蘭草 日

和布を刈 薄の苗 切ちうの苗 比ちうの苗

百合 俗 さゆり苗 俗 さゆり 俗 物多百合 日 ちこゆり 日 車ゆり 日

紫陽草 世ちうのもの 未摘草 多のもの 俗 石菖 日

高花草の苗 萱草 俗 夏苗云 憂を忘草とふ

下野野の苗 俗 苗菖蒲 日 金銀草 日 無ちうり

薫 日 苗草より似て紫色白花あり 立ちうり 日

外菓 日 日新ちうり 薬 牡蠣草 日 天蓼 日

覆盆子 日 木ちうこ ちうこ ちちうこ 蚊帳草 日

[illegible] 俗 [illegible]
蒐 日 茄子 日 早瓜 日 漆瓜 白瓜 日 千瓜 日 早松蕈 日 安らぎ 日
かつき 日 面天の芋 日 さつま 鄭躅 日 生胡桃 日
[illegible] 日 梯子芋 日 びやうり柳の花 日
橘 落橘 [illegible] [illegible]芋 [illegible]の芋 [illegible] 杏子 日 枇杷 日 青山椒 日
[illegible]の芋 [illegible]竹 [illegible]竹 [illegible]如 田[illegible] [illegible]苗 玉ちく
貴田 田[illegible] 栗 [illegible] 俗 稗 粗 胡麻 ホまくとい 五月 [illegible]
[illegible] 八月 [illegible] 老圃 [illegible]
[illegible]めひく 日 ふるい十月し 穀らふる 日
蚊柱 蚊[illegible] 蕎 [illegible] 俗 蚊やり火
水[illegible]の菓 かるめ子 [illegible] 俗 [illegible]

水鶏 [illegible] 真法云 [illegible] 新し [illegible]
[illegible]を [illegible] おぬけ [illegible] 鯰 [illegible]をぶち 魚菓 竹
鵜川 鵜飼 鵜舟 鵜舟 鵜縄 俗 鮎 鹿の子
鷹狩 狩ひ狩 照射 [illegible] [illegible]を 真法云 [illegible]
[illegible]
[illegible]て [illegible]を [illegible] 山中 [illegible] 麻 [illegible] 目 [illegible]
小鯀 日 水鯊 日 水鰒 日 鶏の菓 俗
昌蒲帷子 俗 五日 ひとつもの 日 ちつもの
[illegible] 日 真法云 [illegible] [illegible] 日
[illegible]

六月 こころ文 風待月 なるかみ月 常夏月 林鐘 且月 鶉月

陽氷 水無月とハ水無月とふへきをこれつなるといへり又ハ五月に挿し早苗乃
皆つきたる心とも云やく貞徳云此月律林鐘にあたる故名付しなど
鐘のなる声を用ゐて此比とやみのうたも訓よりひひきなるハ誤なり

氷室 一日 氷室の御調 氷のためし 氷水あそひ 氷室の色 氷室のさくら
氷餅祝ふ 俳 貞徳云氷室の氷ハ四月一日より九月まで献ずる御つかれ
とも六月一日を朔日と用る故今日を御定とす
予今案ずるに四月より献ずる事ハ延喜式主水式に見えたり 熱月なれハ
御膳にも氷を用ゐるをひのおもとといふ 源氏常夏の巻にも氷水
めしてあそひ給ふ 千載集にも氷室山より携をうてまつるよしあり 又
氷室のためしをあつし 此比の世俗ハ氷餅を氷に准へて朔日に用ひ侍り

忌日の御飯を供ず 一日 忌日とハ不浄のさをおそるゝ事也
月次祥 今日は今日斎なども供えるを一日より内膳司より供るを
大床子の御膳にて供ず 公事

一夜酒 ことなり あま酒 俳 ひとよさけ今日造れハあくる日供する故なり
貞徳云醴の字をよめりあま酒ともいふあま酒をも云也 六月一日
より七月晦日まで毎日毎にたると公事根源にあり

六月會 四日 伝教大師の忌日なり 比叡山延暦寺にて行なう 勅使立 公事

御禊の御卜 十日 神祇官の官人主上の玉体に禊つくしとあそふを占ひ
奏するなり 公事

月次乃祭 十一月 十二月もこれハ六月十二月朔に諸社へ御幣を
まつりを給はる也 公事

神今食（ジンゴンゴキ） 同日 これも年ごとに行はれ、伊勢の神宮を勅使ありて天子
みづから神饌を供せられを行はるゝ云々

解斎（ゲサイ）の陸粥 十二日 神今食の次の日陸奥の大庭よりて基盤一脚を
そなへ供せられ粥赤き土器に和布の陸付物をそへ三口食して御
箸をつけ云々

祇園會 七日 同融院天延二年六月六日即平といふ者の京七条東洞院へ
祇園の霊を勧請し宮を造り七月の末に祭り秀吉公乃
時分の世京京格に旅所に近所あり

長刀鉾 函谷（カンコ）鉾 五条天神の事 俗人形棚に乗る

白鳥 鶏鉾 人形棚に乗る

菊水鉾 義経牛若丸の形 義経校人形に弁慶桂景を費長房を乗せて

重陽に菊の花を浮べて酒を飲む 放下鉾 ささら人形あり

舟鉾 神功皇后に後良干珠満珠を授けて三韓を討伐へ給ふ

岩戸山 日本紀神代の巻乃ち天地いまだ分れざる時に天の岩戸を開き
神楽の始まりと云ふ天の岩戸を開きて月神
岩戸を出でゝ給ふ天の岡のちぐさの花を流しゝ体なりと

石見山（ウラデ） 神功皇后三韓を討伐ん給ふ松浦川に出て鮎釣給ふ体なり日本紀に

孟宗山 孟宗の竹に筍出でゝ多和山なり

郭巨山 月宮殿なり 琴引彼山 蒙求の載逢彼琴 或は伯牙瀑絃

蟷螂（カマキリ）山 支那の蟷螂斧に不古体なり

白楽天山 道林禅師秦の望山の松の上に坐して寶和尚と問答楽天
行て問答なり 諸悪莫作諸善奉行の体なり

大子山　平安ちの天王ちの良材をもとめ法山に入て杉の木を取て本の像を刻
作りし体をを移の所ちの角堂を元亨尺書に在
木賊刈山　ちくさ刈ちの赤山の木のちくさに刈出る秋の赤の月とちくさ
ちのちくさ　戸刈山　大和物語に見てあーくりけるとちふ
まちのちくさの歌ハちくさとちふ
宗造人山　出雲不詳　ちの歌ハやくもの月とちくさ
槻ちくさひらを槻を形ちくしに作る
山伏山　天狗山　二　笠狗　二
十四日　七日に市族へ出給ふ狗賊を市社へ二ーあるく
橋負岩山　義経記ちくへ——鞍山　拾門の三級に鞍乃登ち作く
[illegible]ちくふ山　平家物語ちに宗盛公の背井浄妙と一来法師とし頭う

宗ちくとちう物語ーう作ふ山を取ちくとそ作る山のちく
黒主　ちくう序に宗の作ちくとちくちくとちくとちくし又西行橋とも云
役行者山　大峯ちく役のうちくちく小角鬼神を使へちーふさるく
牧原山　出雲不詳　ちくあちくちくとちふ鬼をちくちけーさるとちう
或説に鞍山ちくーを考ふをを作ちくとくてちく
鷹山　高砂乃作く　橋かひちく人形ちれハ橋ちれ山ともちく
紀高山　舟ちく　七月に舟ちくとに大ちくに日ーむちーハ禁中ちう馬長
ちくとちくちくちくーちくちくちう今ハ十ちくちくーちくちくちくちく
又長下とちふちのハ行ちのんまちうちくちくちくちくーこ三ハ宝て天王の長下ちる
へーー山ちくちくとちふハ作ちく物ちくをーて狩ちくをちくちくちくちくちくちくや世話ちくちく
今ハ鞍武小今人乃威儀弦ちくーの供奉ちくとちくちくちくちくちく山ちくとの

若狭八幡奉行所の国にて生れ給う 紙屋いきとりなどの子孫 牛頭天王廿
武塔天神と疫病の神とを祭りおのゝ一ところに合祭 稲田
姫と云うこの女と戸ごとに一所に八大王なり 稲田に祭の所なり
清水祭 例 十四日五日毎年にて夜桃灯を点ずる 尾張国
熱田祭 日 十四日 海道記に出るものなり
いつくしの祭 日 十五日 竹生島祭 日日
江戸の山王祭 例 十五日 太田乃道灌文明年中に江戸山王権現を勧請
相国寺のきんせう 例 十七日 桜門にて松明と云鉄鉢を焼く
祇園院御乃祭 十五日 勅使にて東坂を登る 代の八坂の里と云ふ
東坂のことも出でぬ
かぢう 例 十六日 嘉吉食 日 新宮祭 日

世祖四年云世事を以て彼嘉吉通宝と伝えしを
勝とふことをうせんを奏聞 季吟云今のちゝ
さるものの残りをもの又采に合れ給うものと伝う
伊勢乃祭礼 例 十六七日 出家も糸をとる
物の多祭 例 十六七日 筑前 志賀乃祭 日 十七日 讃岐
産土の宗 日 十九日 冨士詣 日 一日より廿日まで 冨士市
冨士ことゝ出る 出羽 陸奥 洗濯日 ちゝ千里
鞍馬乃竹切 日 廿日 光岩千日詣 日 廿四日
橋立祭 日 廿五日 毋修し 天満宮祭 日 廿八日 天満
宮に任官祭を准て出給とぶ 大坂 住吉祭 日 廿二日
かぶ祭 廿月乃祭 日 三十日 伊勢 日 日日

[illegible]

節折（ヨリ）　竹を主とし陸奥のすがを折あてこれを
[illegible]といふ　節折の令如竹をもつてこれをつくりてこれを
[illegible]

大祓　六月晦日祓川に人　京人　多くの人　紙条　ちとせ人
[illegible]

荒ぶる神をなだめ和ちとなるべくそなへたるものなり
[illegible]

形代（ヒシロ）　は紙をもつて人形を作りて身の災厄をなすべて川に流すなり
[illegible]

疫病　茅の輪（ワ）　光孝天王疫病を祓つる者法なり
[illegible]

夏神　川社　これも夏祓なり川名に棚をもうけて神を祭るなり
社中物よりて夏神の時に
[illegible]

小蠅（サバヘ）**ちらす神**　夏虫云蠅のごとく悪神多きゆゑにさぐちなる人
神もおのづからてきふちとなりて
[illegible]

結火祭（ヒシツメノ）　六月十日　ト部氏の人火をおこして京城の四の角にて
[illegible]

ゑをうんあるとしるす　俗

道饗祭（ミチアヘノ）　日月　四季四境のまつりなり

こゝもと神武氏の人都の四方の境に思魅の他方より来るを京城より

のさうんあるよう防ぐよう供物を供へてまつるとし四角四境の祭なりとす

施米（セマイ）　東山西山北山ちかの山ちかの山ちかの文法師そうよ米を施すけう

ほうとしるすしるす

雷の陣（カンナリ）　雷のなりくるくちまへ

大將殿下近衛の次將まてらの名を第一ては殿の御前に候して帝を

ちかう（シュゴ）護したてまつる　西方部より六月の部まで物ならべて立る相撲なり

六月の部

温扇　月令

小暑の節　六月節

大暑の節　六月中

腐草螢とする　月令

溽暑（チョクショ）　土用の内　日

夕立　月令に大雨時行と云り　俗

天貺（テンケイ）節　六日　宋真宗祥符四年ここにつゝて六月六日を天貺節と

せり　書言故事

三伏　夏至の後第三の庚の日を初伏といひ第四の

庚を中伏といひ立秋の後最初の庚を末伏と云ひ伏とは

犬いぬし秋に金し夏至に一陰生ずれども火威ちからなき故に金氣伏

くるをもて伏といふなり　書言

秦の時より伏祠を作りて蠱毒を

防くよう伏日よりまつりしるなり後漢の時伏日より鬼行して疫日

宅を閉るるなり　事文

土用干　俗　虫干　虫拂ひ

汗拭ひ　俗　簟（タカムシロ）　竹敷　竹帳人　脚馬　たらひしわい竹うてをまる

扇　扇車　俗　扇子　日　扇子まつり八月園扇日　京園日

筵ちり竹敷竹帳人脚馬をいてよ或い足をそなへたるをもちゐて涼しくす

[illegible]の[illegible]山谷詩よりおろし[illegible]

涼　月涼―　夜涼―　貞徳云琴聴ちくさうの水もも涼しとよりてきく納涼とも

又涼[illegible]とも[illegible]避暑とも

風薫（カヲル）　南薫　六月よみ涼風し　芭蕉自南亭と吉文新集[illegible]

雲の峯　夏雲多奇峯と酉閑唱り詩し　貞徳云六月照日の時分雲の峯

[illegible]

いとゝ　糸水　清水流ふ　貞徳云清水ちくもきく

[illegible]　六月よみをさくーる　おさそう風　俗　時代世ゝ

醤（ヒシホ）つくる　[illegible]ふと　俗　今[illegible]てんとよりよ拙し　座刻よ西山の仙[illegible]

武徒よ東山の芋ほ掛ーる　芭蕉八大根くとよりて先年[illegible]

発句ちよくまひ拾ーる　[illegible]ーる　[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

つくりよりひ先柱掛[illegible]

支切の菓　俗　川狩　日　梅却子　日　黄桃　日　桃つけ　日　早桃（サ）　日

楊梅　日　[illegible]　日　林檎（リンコ）　日　百日紅　日

極子　[illegible]　川糸桂子　俗　雪踏み　日　[illegible]　日

常文美名　石竹　蓮

具[illegible]　[illegible]　俗　[illegible]　日　貞徳云[illegible]八[illegible]

[illegible]　石蓮　白蓮　沢瀉　俗　河骨（カウホネ）　日

[illegible]　日　[illegible]秋し　蘭乃穂　日　海松（ミル）　[illegible]

蘭を[illegible]　俗　[illegible]八土月[illegible]　土佐日記

眼皮　日　[illegible]　[illegible]　凌霄（ノウセン）花　日　ぎぼうし　日

きつね草 俗 ほうき草 日 射干 日 一説ほうきかき 日

紫穎 日 青苧 日 麻 桜麻 苧の類なり 麻引の糸

麻芋かるもの 俗 ちまき 日 作法芋 日 麻を刈いなし 二番刈い秋し

夾も秋らし 香需散 番薯とかくも 蒜の根

瓜 青瓜 かも瓜 俗 水瓜 日 おこて 日 王瓜 日 胡瓜 日 姫瓜 日

夕顔 ひさこの花 俗 ゆふ 日 干瓢むく 日 豆角の花 俗

小菊豆 日 ふりひさもの 日 ひさうをあさまさるるなし

蟬 うつせみ せみぬけうら 俗 せみこ 日 せみのをろあ

夏虫 多おこうそとくむし 蜉蝣 穴うむしといふもおろしるひうろ 夕蝉

蟬 ちちこそとくうろ 蟬 秋の隣 蟬 秋の蟬 蟬まつ

蟬 白藏 是天 金商 時景 爽籟

七月 ふつき ふつき 文月 蓋王 支月 日 涼月 孟秋 初秋 おそ分へし月 日

夷則 孟秋 相月 支月 文月 文をうしいろを好よ文ひろけ月とも

文月とも芋 夷則い七月の律 蘭月 蘭秋とも芋

孟秋 けさの秋 秋の初風 肇秋 餞暑 朔日し

楸の葉をいつてく そろそろ 楸の日都よ楸葉を妻を求て

女よりうとくちとけるく 姿形よ切りて載くるをし 伯とし 芙蓉 緑

楸とそろも秋らし 一葉 ひとの舟 一葉い相し 書言

柳葉 桐 梧 楊 竹葉 俗

掃待 日 箒を持手の人よおろ 切るるし 乞巧の日ちれいをふさし

七夕 清水 日 六日 社次のをちたい七月し

七夕　あさつゆ　ひさかた　ひこぼし　たなばた　ひこぼし

星合　星祭　星の手向　星の契　織女　牽牛　河鼓　わたるる日

をるる日　二つの星　彦星　牽牛　宣長の伝　ひこぼし　たなばた

あまのやそしほ　七夕　日本紀　たなばた

あまの川　銀河　銀浪　銀漢　星河　星合の床　星の手向

年の渡り　一年に一度天の川を渡る　年に一度　年に一度

舟　舟こぎ　舟　舟　舟　舟　舟　舟　舟　舟　舟

かささぎの橋　かささぎの橋　かささぎの橋　かささぎの橋

織女　織女　織女　織女　織女　織女　織女　織女　織女

あさぎの機　天帝の娘　天帝の娘　天帝の娘　天帝の娘

いとをかけて　天の川を渡りて　七月七日

舟をゆかし　行かふ時　烏鵲橋を渡りて　織女をこひ　たなばた

七夕　七夕歌　又川をもいと舟　舟をもあまの　舟こぎ

又ふりさけ見る時　天の原を橋　橋　橋　橋　橋　橋

又　又　又　又　又　又　又　又　又　又　又　又　又　又

秋の衣　真袖　真袖　真袖　真袖　真袖　真袖　真袖　真袖

乞巧奠（キツカウテン）　乞巧奠（キツカウデン）　乞巧奠（キツカウデン）

乞巧奠　乞巧奠　乞巧奠　乞巧奠　乞巧奠　乞巧奠　乞巧奠

七夕　七夕　七夕　七夕　七夕　七夕　七夕　七夕　七夕

七夕　七夕　七夕　七夕　七夕　七夕　七夕　七夕　七夕

七夕　七夕　七夕　七夕　七夕　七夕　七夕　七夕　七夕

七夕　七夕　七夕　七夕　七夕　七夕　七夕　七夕　七夕

ある日蜘の糸引くるあるを軍の納采のあるべしとて大うさ
軍ものを寿とする軍を一つをそなへて云をもるの
うしとなり　乞巧針　ろこうしんの人と物みるべきの
糸をとりて針をかるるのし　荊楚歳時記云ふ
七箇の地　早をこのるよりのうぬる水をのみて技をつけて星の糸をうるはしてうるはしく
梶の葉　芋の葉の露　俗　これは世間の風俗なり　旅をする
芋の葉の露を取て清て梶の葉にうくしたる
七日の節供　内裏にてこれを朝をそなへる
素餅　むかし吉平の小子七月にあるに疫病と称して人と疫
病をもちもちて看病をしてよく治する日
もちゐて素餅を用ゐれい疫病を除るにうけ節記云ふ今ハ

素麺を用ゐる好色伝にあるなり　西瓜　七月廿日にあるなり先車両と云
車清川踊の終日　俗　七日　星をまつりて家々にて
乞巧奠　七夕の鞠　同

遅乃宴　同　本山八月　南山八月　文殊会　八月　寺々にて行
仏名会　俗　九月建仁寺にて
うるを冥途をとらふて所を異にして旅人をまつて待つるなり
棧敷　同　二条六条にて
清水寺千日詣　俗　十日　中元　同　十五日なるべし中元節とする
盂蘭盆　うらぼん　孟供　施餓鬼　目蓮尊者の母餓鬼のなりて食をもとめ
ものをもとめ供うるなり　七月十五日百味五菓を供へ十方の

佛に供養せしめ給て母餓鬼を免かる大目連佛にとふ
佛弟子の孝順をおこなふものは盂蘭盆をつくりて父母を救ふへしと佛
大衆とのえまつるへきよし盂蘭盆ハ梵語なり　盂蘭盆経

玉祭り　聖霊棚 俳　棚経 同　みそ萩 同　枝まめ 同　枝ささげ 同　根芋 同
まこも 同　ところてん 同　瓜なすびの馬 同　麻からのはし 同
ちなみに人の忌日をまつり年々六度のさし報恩経に見えたり
中元 七月いふぞかしこれは一のよきまつり佛の道を説玉ふも十五日なり
地官罪人の善悪を分る日なりとて道士此日道経をよみ諸の
供物をそなへ雨ちひて鉄丈和尚こそまつりて餓鬼のなかしをき
をふくむ事文類聚に見え報恩経には十五日の行の時をきたりて
十六日の朝時を過るなし佛り

墓参り 俳　七月初先祖の墓にまうでつる義なりいふのみならず唐にも
七月十五日は先祖墳の塚におもむき仏法の供養をなすこと文集に見ゆ
生身玉 同　生身魂 同　さし鯖 同　世に父母ある人は生身玉とて
いきたる親に文をおくりても生身魂と鯖をおくるさばのつき家のさかへを
灯籠 俳　灯籠ともし きりこ灯籠 俳　舟灯籠 同　高灯籠 同　切灯籠 同
新灯籠 同　禁中にてはこの灯籠あり南浦門跡にも伝ふ
かけ踊 俳　小町をどり 同　きそをどり 同　笠をどり 同　こむそうをどり 同　松ヶ崎をどり 同
三井寺の女の躍 同　十八日　寺は女人まいりて今日いつも踊しゆり
送火 同　十六日　施火(セビ)ともき 同　山の送り火 同　たてか石ハ大文字松ヶ崎八妙法
八撥安居頭(アンコノトウ)　十五日今は十二月十四日　形心静揃日安要期此佳日居と
釈氏要覧にあり　迎火 俳

解夏(ケサウ)祭　漸寒信有之日線をもて節をつくりて極熱を待るをしらふと
釈氏要覽にあり又八吉祥菜ともいふ

水うけ菜　俗にいふ真田大根新菜に切りくいせるさまうり瓜等に
稲の穂と又は俗にいふ蓼の穂のごとくなる

地蔵祭　俗廿四日　廿七日地蔵ちかく童の行列をなすまつり
ちかくなるまつり　真田大根ちかくなる山稲も俗はのりこえ俗はもの
稲穂をかる　真田大蔵の稲をかりて俗にいふ

法華祭の法出　十八日　八所のひら美し　芸藩通志に美し

相撲　ちかく俗万歳　童相撲をなす　俗世美八
をい結圓の俗法の人をあ一おつりて七月ちかく相撲の節とりて天ふり
法華ちかくなるもし美ちかく相撲俗と書てちかつかとさむ是ハ

結圓のちかくなるもしをもて俗の事をもてそ年中行事文人寛平七年ふ意訳撲
をも笑をそなり　弓矢ちかく相撲の秋ちかくなるまい七月の初もあけるを
けさいちかく一ちかつかせるいつもちかくなるいい俗をもてい迄ちかくなる
いひてもちかくて秋ちかくなるもし

霧　しら露　うす霧　俗の霧　俗の霧

霧　青の海　青の色　朝のきり　雲之人　青ひら　月をきりふさる

稲葉　ちかつかの　俗　ゆる異ちかさ　秋嵐　名三人　名ちかつて

ひしかり　爽氣　扇おく　園扇(ソノハ)おく

木槿(クリゲ)　自今ちかくなる丁酉不好　茅巻　俗　敦彦　素牛茶　俗

ちかくなる一一　女郎花　をんれ一一　俗　ちかつ　白菜　俗　あらくき日

萩(ハキ)　糸萩　小萩　ちかあ一の萩　萩の詩　廉姿菜　美名　ちかくなる年日

萩殿　萩の戸　禁中萩ある所し清涼殿の北なり

笹さゝ　蘭一名し又若紫と呼て細くもむさゝと刈ちり　芭蕉

小車の部　仙　きちかう　日　桔梗　あつの花に　えゝこ草　日

萩　さゝとあき　萩のうハ葉　真仮名いせの国萩はいせのすりられい絵ちり

萩をもむさゝいちはなし　下萩　野辺の萩

おくしもちの花　仙　きゝこし　茅おりさゝをさゝ〜に似てさゝ〜

白〜紫ゆかきをこれの花咲とつふ千おり

きまゝ草　日　おはなゝとて千まちり　ほんゝ草　日

仙蘭花　日　蘭草　菜師草　日　師草　日　アキリサウ　京切草　日　京の草し

釈迦草　日　秋花咲ゆ扇し　ヤクモフウ　姜母草　日　あさちき草

おき花ゝさ　日　第二ちゝ花の花白〜紅ちゝ似てむちり

ちゝの花　日　ちゝあ　日　ちゝあの実ふ　日　絲瓜　日　糸瓜の実　日　蜀漆乃花　日

穂乃花　日　早田　室の花　真仮名ちゝの花　日

おる蚊　蜩　ちゝとゝ　真仮名ちゝ　ちゝ　蛍の蛍

蛍の幼虫　ちゝ音を　ちゝ　蛍の蛍

蟲　蟋蟀　つゝちゝ　ちゝ　ちゝの蛍

ちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ

蟋蟀の部　仙　いとゝ　蟋蟀　ちゝ

蟋蟀の部　蟋蟀　ちゝ　ちゝ

虫　虫合　仙　ちゝ　合虫　日　ちゝ　ちゝ　ちゝ　蟋蟀　月令　ちゝ虫

負虫　云　蟲虫　ちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ　ちゝ

物の名きゝる蟲虫と云也　秋ちゝに雑と云る也　秋ちゝ

[illegible]

いなむし　田虫なり　蠶（イヤ）　他　處暑節　七月中

[illegible]　月令　[illegible]

秋雪　或八月　秋雪（マト）　特　日　皇国云ふ所の雪をそなへつゝ

秋雪とは秋雪待ちもつてし雪なれの雪とは雪ぬけるを

[illegible]

[illegible]

蛟　秋雪秋は山蛟の秋にはうちはけい人蛟のまをしてもと入をそ

[illegible]

冷麦　他　あつ麦　日　[illegible]　日

八月　さつき　秋風月　蒼玉月　月　仲秋　南呂　壯月　中律

雄月　[illegible]

八朔　[illegible]　他　繰行（エボカイ）　日

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

白露節　八月の節なり　天中節　八月一日なり　七月

[illegible]

白舌[illegible]節　[illegible]

[illegible]

水村祭 仙 一月二日 堺の大宮

堺天神祭 仙 二月四日

北野祭 四月 [illegible] 日菅原氏子孫多て枇杷を取て神に供ふ

白鳥の明神 仙 五月山門の僧多て事を行ふ

敦賀祭 仙 十日

[illegible] 十一月 [illegible] 根原宝考 [illegible] 胃擬階奏乃人を撰出て [illegible]

[illegible] 官の六位已上の人を [illegible] 紫微行幸を撰て [illegible]

[illegible]

いきるをとこ 石清水 放生会 仙 十五日

元亨年間四年九月吾国を奪んとす 付大嘗祭の

祈かなりて敵を退て後鶴岡の人を [illegible] 放生会を行ふ

[illegible] 紀宣旨 [illegible] 砂毒年 熱田 [illegible] 芝蘭問答

[illegible] 放生門 [illegible] 秋 [illegible]

阿野津の八幡祭 十月 仙 [illegible] 志賀八幡祭 日日

[illegible]

[illegible]祭 日日 [illegible]祭 日日

名月 [illegible] 名月 [illegible] 日 [illegible] 仙 [illegible] 韓昌黎詩 月乃会

[illegible] 彩月

月のいわい

夜を [illegible] 月と [illegible] 三月 十六夜の月 [illegible] 十七夜

居待月 十八夜 [illegible] 十九夜 月の弓 弓待月

月乃会 日本紀 上弦下弦の [illegible] 月乃会

月の舟 [illegible] 月乃会 仙

小月 仙 十四夜 十五

玉兎 同 兎なく 月中に八足の兎ありといへり 月の桂 同 玉蟾
月中に三足の蟾ありといへり 常娥 姮娥 これ仙女の名なり仙薬を
ぬすみて月中にかくれしゆへ後これを月の名とするなり
月の桂なる 月中に五百丈の樹ありと酉陽雑俎にいへり 見るべし
桂男 呉剛といふ仙人 月中にありし是を桂男といへり
月の華 俳 或人云 月のてるにも花ありて 白気黒
気ありて花葉根をあらはすなり 是よりて花盛りの花を月乃
ころとして 月影にて近きものをいへり
月の剱 俳 三か月をつるぎにたとふるといへり
月の霜 月の光の地に落て霜のごとくなるをいへり 廿日亥中 俳
廿三夜の月 夜中 同 これ月の出る時なりし 月の顔 月を顔のやうにいふ

星月夜 名月夜 雲の光 夕附日 双星 吹月夜
管（カン）大臣祭 十六日 五条坊門町西洞院に紅梅殿と云これ是天神乃
旧所の跡也 駒（コマ）索（ヒキ） 駒迎へ 望月の駒 芳原の駒
信濃の牧の駒来ハ昔ハ十五日なりしを朱雀院の国忌にあたり
けるにより十六日に定り 諸牧より駒を索て来るをいふなり 十七日にハ
甲斐国穂坂の馬をひく 廿日ハ井 武蔵国小野の御馬をひく 廿三日ハ信濃
国望月の駒 廿八日ハ上野国の馬をひく 委ハ延喜式にみえたり
御霊祭 俳 十八日 八所とハ 崇道天皇 光仁帝子早良親王 伊予親王
桓武天皇の皇子 藤原夫人 伊予親王の母 藤大夫 ... 橘大夫 逸勢
文大夫 文屋宮田麿 火雷天神 菅丞相 吉備大臣 此八の霊を神と
いはれし 此祭のとき...あるを...世継...

世祭之玉の鼻とつゝ物のうくれる稲田彦ちるへ一岐祢鼻ちるし
年日本紀ちるゆ

後の祭 他 穴八日 秋分の節 八月中ちる

神武祭 居ちる祭 死活祭の祭 他 秋彼岸の初日 褐速社とて
ちる者へ毎年八月ちるそまつるの古い古形の司新獄刑法を
之を五刑を行ひ之死刑の者の追善まつりと磯原物の祭
ちる 褐速一伝ニイチハヤとちる

釋奠 上下日 先師孔子を祭る 二月ト同一

秋社 秋ちるの社ちる逆之戊ちる五穀の神を祭る日 王者五穀ちる主を
封一し社とて候ちる逆と禹貢の法ちる主ちる祭ちる

新田祭 負虫之秋ちるを除ち遠化の祭

秋の之 中ちるの祭 但之自ちる

菊花会日 他

木犀乃宴 日 蕃薯 日 棚ちる 東之 他

宇治の茶園 茶摘之 茶壺之 鶯 鶯ちる

藤 赤藤 ちる藤 赤藤 ちる藤 一之藤 尾茶 茶の花ちる 他

刈萱 笠ちる彩物 茶ちる 金 茶祭 壇特茶 他

志ちる 紫苑 ちるの志ちる 自茶 露草 他 ちる茶 日

菖蒲 ちる菖 菖ちる 菖茶 菖の根を塩 他

茶の茶付 花壇 他 野菊 日 掛仙茶 日

鈴乃茶 日 金剛茶 日 鐵 日 かちつる乃宴 日

一説に朝皃は一説かほかほの花と云 又桔梗の事とも云り

きちかう 又桔梗 俳 うらら草 曰

あけび 曰 蓼タデの花 曰 穂たで 曰 茴香ウイキヤウの実 曰 冬瓜カモウリ 曰

からす瓜 曰 玉づさ 曰 牛房ひく 曰 芋 芋の茎 ずいき ぬく 曰

茶摘ル 曰 かりやす 曰 きぬた夜 曰 そゞろ寒 俳 初つま 曰

こうろぎ 曰 菜種まく 曰 大根の種まく けしまく 間引菜

衣うつ 擣 曰 夜さむつきぬ そゞろ寒 俳 あきやまき 曰

鶉 片うづら 曰 鳴うづら 曰 鶉衣 紋なき衣也 鶉籠 俳 鶉細 曰

鴨 鴨の羽かき 川原鴨 糀鴨 俳 初鴨 曰 真鴨つきあく 曰 鴨の羽がへ 曰

流るゝ 秋社の字をとれり 稲負鳥 古今伝受の秘事也

雁 かりがね 白雁 俳 海雁 曰 ひし雁 曰 もろ渡る 曰

負鳥云 千鳥にあひて八秋也

小鳥わたる 鳥 ひよ鳥 つぐみ ましこ ひわ やまがら ひたき 四十から 小がら 目白 めじろ 菊いたゞき あとり いかる 鶺鴒

鵙モズ 鵙の小鳥の名にはあれも俳諧にいる也 鵙の声 鵙の早贄 これをはやにへ

古林云 村里云 鵙の草ぐきとは負鳥の名の鵙の原を草ぐきといふ 又鵙の蛙やどの袖を草かくれにつくる也 ともに鳥を草の中にかくしてとらふと云り

小鷹 小鷹狩 これは鷹を放ちていふ 負鳥は秋の鷹がりをまてあり

鵯 鶉鷹 俳 うづら取鷹也

鴟鵃 鳥 皆秋也

亭ノ町　おくるたいるる　カ　ひくい紙　高紙

下り藁　崩藁　麻　うせき　そうの鳴　小男麻ノ麻　紙　麻布　日

石紙　麻の異名　神紙　紙　江紙　日　神人江の蛙とゆひて秋の

季ちうとゝつり足江紙を手あやまるを尺て又誤作る

スギ

杉皮　紙ちうた　小額引　紙　ひくこつくるも秋

野分　暴風　八月次大風　神泊　八月ちうきまるちう

田をち　田をつく田を刈　稲束　稲穂　八束穂

稲筵　真菰玄筵を炎ちうよ稲の面の辛ちうを下ち又知るの田今を

いれむしつとたるもあり足い秋ちうい物ちうい二ちうきらふ

いなむしろ川ちう秋とちうもあり柳のちうきちう稲筵乃やう

ちうとちうもしい秋ちうり足ちうし

案山子　ちおぐし　そうづ　引板　ヒダ　うるこ

かくしいちおとしの人形ちうの添水と手て水をこちうけてちうの

ちうを添てちうを出て麻おちうしし引板の板よ本をちうて絶

引て鳴ちうのし鳴ちうのつまのるもかくしとちうついちうの乃物

ちうれとも玄賓の山田ちうちうと僧紙ちうてちう紙ちう

おちうしの人形とちうて古ちうもちうおちうし紙れい玄い別の

物之元年　石川丈山ちう門分ふちうづを作りてを文字

玄麻を小麻学をもて帝ち高こしの帝ち所説ち

但て答作しちうちうくれとし

九月　長月　紅葉月　小田刈月　日　寒月　日　楢の秋　季秋

玄猪　亥月　菓子　仙　素秋　免秋

西の方より吉日とて亥の月の亥の日に本宮の社とて石宮まゐる

又本の社とて[illegible]　本宮月とも云ふ　亥猪　九月の猪ともいふ

又は亥猪とも云ふ

時行　二月　二月のころ　七月　七月の頃　熱田の宮の摸造　[illegible]

不堪田奏　[illegible]　[illegible]

桂宮相撲　八月　[illegible]

泉涌寺念仏会　[illegible]　[illegible]

[illegible]

重陽宴　重九　菊酒　菓茱萸の囊　菓茱萸　[illegible]

菓のきせ綿　九月の九日に九月九日を重陽と云ふ

[illegible]

囊をかけ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

醍醐祭 俗九月後五日 法香会祭 同月伏見之社切々座を設へ

競馬祭 同日 貴布禰祭 俗 同日 [illegible] 日 同日 大坂

出宮祭 十日大神 下鴨祭 十日 皆俗也

例幣 十日伊勢を神宮へ法幣を[illegible]毎年のごとく例幣

[illegible]

住吉相撲會 十二日於岩 住吉の市 同日 室の市とふれし

神輿をかつぎ神官供奉し神宝を[illegible]宝幢を

[illegible]

白河祭 俗同日 後の名月 まあ月 俗 栗名月 同

[illegible]

天王ち一条会 十四日於芋[illegible]八十五日 岩倉祭 俗 十五日北山

[illegible]祭 俗同日参お 勅祭会 [illegible]

[illegible]祭田口祭 俗同日 [illegible]川橋の東八大天王の[illegible]俗家牛[illegible]

[illegible]

[illegible]八侍神 [illegible]天王大歳神 [illegible]王天王 大將軍 俱[illegible]天王太陰神

得達神天王歳刑神 良侍天王 歳破神 侍神相天王 歳殺神 [illegible]相天王

[illegible]懐神 蛇毒恩神 [illegible]尾神 以上[illegible]咱[illegible]簡[illegible]内傳委

一宮祭 俗 日日 [illegible] 神田明神祭 俗 同日 [illegible]

[illegible]代孫平將門[illegible] 度会新嘗会 十六日 伊勢 [illegible]

呉傍祭 仙 同日東山　山口祭 月 中巳年 周防

呉服祭 十八日 あやべ国つくしの国也 国つくしの
神社 呉の使主を呉国につかはし工女をもとめ給ふ
兄媛弟媛呉織 穴織四人の女をあやべ呉織 篠崎 白形
大神 あやべ 津の国つくし 日本紀 あやべ 穴織を
あやべとよふらるべし

婆利女祭 ハンヂ 十八日 吉辻室町の西 あり 六月九月 ちよう を中比
とりれ月とも 先年此社信長卿 三河 此神体 弁 を
めしをとられとなる 又此社 つれ 尺 ばる
あるべとなり 吊 よ 信長 色 あり れい 歩 て
つくべし 伝 むし 前日 人 此 ら

すりなる 夢 とも 紅山 ゆ れいその 花
鞍 ゆ 郭 あり 清 ら 吉 ら
此所 伝 塚 ら 毛 問 人 社 ら 伝 ら 社
荒 ら 弁 ら 伝 人 社 ら 伝 ら 社
故 弁 伝 ら 伝 ら 社
宮場 弁 ら 伝 ら 社 ら 伝 ら 社
三 伝 ら 伝 ら 社 ら 伝 ら 社
ら 伝 ら 伝 ら 社 ら 伝 ら 社
繁昌 ら 又 秀吉 図 此社 東山 信長 月 八幡 文 の 侯
ら 社 ら 伝 ら 社 ら 伝 ら 社
牧 信 月 ら 社 ら 伝 ら 社 ら 伝 ら 社

[illegible]

つゝて紙鳥とゝゑ又ゝ[illegible]計なども唱へてこゝろみ[illegible]

旅夷祭（タビエビス） 同日 建仁寺門前うり 建仁寺祭西入宋の僧さま

洋中まで紙屋ゝ出て舟ゝ危ゝ[illegible]て夷を

舟中ゝ投ゝこれ吾郷の蛭子海神の夷ゝ[illegible]神し拝ゝの類

ゝゝ一文宛渡ゝ舟こゝゝて[illegible]

此ゝ安宅ゝ[illegible]

八幡花乃祝（ハナ） 仙 廿日 仏茶屋 蝶奉ゝ 日上ゝ竹田ゝ

天王ゝ結縁灌頂 同日 祈祷 太秦祭（ウズマサ） 十二日 牛祭とゝ

清水祭（シミズ） 廿二日 天満鏑流馬（マブオリメ） 廿五日 大坂 木幡祭 廿四日

鹿谷（シカタニ） 廿七日 遅蛙祭 四月 北山祭 廿六日

福王神祭 廿八日 本号歩荒神 氷室法親王一人ゝ

鳴滝祭 同日 津村 廿七日 津國 年中行事分合

撰蟲（ユウラヒ） 殿上の道ゝ[illegible]

[illegible]

出棄も[illegible]

七日七ゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

金目黄 俗 大略ゑの日 ひゑ花 ゑ菊 俗 ゑ玉 ゑ幸 日

女花 陽花子 てうの菓 社中所云 菓和菓し 菓和の事 ゑたちる

菓を好し 強て 重箱 菓もる菓をつふちより 俗 ゑ菓 てゑて 東山

菓和菓 てうきくとて

ゑる菓 十月の菓 菓の祝 ゑる菓を祝ひて元祝し

九月小神 俗 菓ゑ ゑ菓 ゑきぬ ゑ菓表

菓陣節 九月中し 財 熟を祭る 月全

和菓 名月菓 菓ゑ ゑる ゑる 川ゑ菓 ゑ菓をむすひて祝し

菓ゑるとゑひても

ゑ未菓 ゑ菓を祝ひても 梅ゑ菓 橘ゑ菓

柾 柞 檀

柾 ゑゑ ゑゑ 柾の菓 俗 榧 ゑゑとゑひても

色ゑる松 ゆるてゑ菓 俗 柿ゑ菓 日 いてう 日 銀杏

未ゑ菓 枝ゑ菓 ゑ栗 笑栗 俗 さ栗 日 いゑ栗 日 むさ栗 日 焼栗 日

椎 椎菓 摩川百首 椎菓を 栗の殼 出 ゑ 一 俗を

物 椎 椎 椎 椎 椎菓も 椎 椎菓も 椎

ゑ ゑ 椎 柿 俗 本 柿 本法 熟柿

柿つき 黄 日 寥 日

東干 筆柿 ゑ柿 久年母 日 柿 日 玉柚 柚一 杜

雲州橘 日 佛手柑 日 ゑるめろ 日 果ゑのこ 日

拓榴 日 多子 サクロ 紫 菓 俗 極 日 桃 日

利木 生の国梨 野の蕪梨 ゑの国い ゑ ゑ菓

ゑうのこ 日 ゑう 椒 日 榛 日 榛 日 園菓 日 ひゑん 日

松子（セウシ）俳　椋の実（ムク）日　きこり日　せんこんの実日

椿かな日　たもの実日　南天の実日　梅もどき日　ぬり木日

聖山の実　聖山の紙　枯聖山の実　聖山の紙　枯聖山の実虫ばみて紙に美錦繡の林俳

綿繡の林日　うら枯

うら枯とそうしいせそ園地色色　玉色ちりのこるを入る

仙蓼（センレウ）俳　蓼枯て　花蓼とそく秋し　落ちる

蓼ふ草　蓼乃穂　蓼の穂紙秋し　えのこ草　誘蜻とそう八重蓼

思ひ草（おもひ）　ゑんそう俳　我勝日　尾蓼　ちりのこるてい伝

ちりぬもうう　紫といふ花眠しふるこ

老女草（ラウヒ）日　をちとの草人おな　花豆（エンドウ）日　ぶんごう日

南ひく日　赤豆ひく日

草枯（ヲヒラ）草俳　松茸日　椎茸日　平茸日

卜沼日　いくち日　氣茸日　ゐぐち茸日　ぶなし茸日　柳けし日　天狗けし日

松茸俳　玉椿（タマツバ）　焼田　ひつち田　新茶俳　今年茶

新田日　古田　苗荷田　新田の土蜘日　紅葉紙日

尾張の鴨日　細代打

雨時雨　雨そそ

秋雨　うそ雨俳　ひし

新綿一重綿　衾を雨　雨を雨　雨をいとふ

ふを行　ちを和　紙を行　秋の雨　雨の雨

ゆく秋　秋雨　秋雨を　秋海棠　秋の海棠

住吉乃神送俳　祇日　住吉乃秋

元英 企雅 上天 玄帝 伴檀 文廷 羽音

十月 かんなつき 時雨 初冬月 小春 神無月 黒月 陽月 嘉穂

上月 暮要 良月 左竹 玄月 析木 秦正 秦の世の正月なり

竹月 神の月といふ特用の宿一年の月なれいかし又四方の木未

なるを比らりとて落葉の月とも人ありいとおつかちり又佛神の

大社へ参りなんとそう 世藏四季 み翰林乗苏抄云一天下の神の月

をいはるるなり神の月ともかし 吾妻の法神まいり

給り給ふなり 又事を始事云 此月絶法の月を月陽ちるを

るをきらふなり陽月とつふく 又変化陽神のちるる月と

つふくるを神の月とゐるなり物忌なる人もあるとく

嘉穂十月の俳句又歳時記より

冬衣 朔日 夜秋の装束 冬の装束 冬の初春 冬の

冬の旬 一日 天空の霜 冬の出 冬の節 冬の二季の後 冬の場

拾芥抄云主殿寮炭を冬の

神医 紙 一日 佛神炉 冬の炉 冬の炉を

冬の糟を食 一日 冬の酒 冬の前楚の人食之 事文

冬の進炉炭 煖炉会 冬の炉 冬の炉炭を

冬の民間の炉 冬の炉 冬の炉 冬の炉 冬の炉

冬の拜墳 冬の墓 冬の墓 冬の墓 冬の墓

十月朔日 冬の佛人墳 冬の墓

冬の禁中 冬の年 冬の陵 冬の墓 冬の墓

冬の子の縁 冬の岳厳重 冬の玄猪 十月亥日 冬の猪を食べる

[illegible]を除くの外は羅漢供養の日なり内裏御願
供僧を召し出し相論をきこしめしとゝのへ桜原の行[illegible]供養
[illegible]をうつして今日もはきんてうとそ人々
[illegible]ふとて[illegible]と世[illegible]四[illegible]

吉水節 十月の吉水 みな[illegible]

射場始 同日 右の場つ弓場の堺をつくいこりし射場始と年中
行事の[illegible]合まを天子弓場に出ましてまをは覧まを公卿
以下東帯にて[illegible]を射る天子は射席を去らせ給て弓矢を持
[illegible]右[illegible]

殿上菊の宴 同日 殿上詩を作て酒を飲ふ[illegible]陽[illegible]日一[illegible]

遠慶忌 同日 十[illegible]の念仏 日 [illegible]

奥福寺法華会 六日 九月廿日より七日の間四[illegible]妙法の
大[illegible]定り[illegible]月六日長[illegible]肉[illegible]の日[illegible]肉[illegible]
[illegible]子を嗣[illegible]

維摩会 十日 [illegible]日より十七日まで七日奥福寺にて維摩経講
[illegible]十六日大織冠の忌日なり

金光明経会 十日 [illegible]十三日 [illegible]上人忌日

下元 同日 十月十[illegible]

正月上元の天官[illegible]を[illegible]ふ七月中元の地官[illegible]を[illegible]十月
下元の水官[illegible]を[illegible]
間の禍福[illegible]を[illegible]て天[illegible]て[illegible]を[illegible]

出雲こ一 俗 一名宇賀ノ山 東福寺開山忌 十六七日
石之国師忌日 天橋の石をとろも此比の事
夷講 十日 南都祝ク 大社神事 中亥日 神集 出雲
神の留る 神迎ヘ 九日 小豆節 十月中
法勝寺大会 十八日より五ヶ日の間 修会
猪開 俗 火焼きする日 田竹焼 日 炉火 日 火桶 日 相火桶 日 埋火
菓の口切 初時雨 時雨 村時雨 夕時雨 朝の時雨 秋の一しぐれ
川なめ時雨 松風の時雨 初霜 霜の鍵 俗 霜柱 日
霜の宮 月の霜 晋女霜 木枯 多く枯ても
冬紅葉 木の紅葉 木の葉の雨 柞紅葉 柳ちる
石紅葉 石紅葉て物を洗ふ 新武 多く木の梢

枯野の露 枯野 くさ野 落枯る 名菓のくさ
萩ちる 菓枯る 昌枯 昌枯るつく枯るもくさ
枇杷の花 俗 菓の花 日 山菓花 日 蠟梅集ニ小寒の節
梅の冷し かんこの花 日 冬牡丹 日 八重の花 日
寒菊 日 冷さの花 菊 日 蕎麦刈 日 花八八月
書まく 日 初雪 初雪消る 初氷 日令 薄氷
時雨 日さむ 寒支 雪をこ 網代 寒の木 寒ろ
水鳥 ひたの役 大和 初雪ふる
千鳥 村千鳥 浦千鳥 磯千鳥 川千鳥 夕千鳥 俗 足 俗
ふーつけ 魚をとらんとて水中に柴をつけおくなり 夏法云
柴の字日本紀ニふーとくちり 水鳥 うきの鳥

鴨 ものの中方 鴨の香 紙 鴨鍋（カモダカ） は 夜興（ヨコウ）ひく は
鴨 ものの中方 真鴨 紙 真鴨 は 真鴨 は 水鴨 鴨の子
生海鼠 は 鱠（ナマコ） は 榾（ホタ）
炭竈（スミガン） 炭 白炭 紙 炭 以 は
炭 羊琦とつふ 若炭の形上炭をして 酒をあたゝめ 坊子 朝鮮菜
綿 たゝらこく 紙 綿ゝつ は ゝこゝ は 蓮綿 は 綿ゝ は
綿子 は ひゝゝこ は 多ゝ は きゝこ は
食 ゝこゝ ゝこゝ方 古ゝ方 ゝ方 紙 紙ゝ方 は
紙子 紙 薗 は 以巾 は ゝこつきん 九つきん ゝんゝ は
液雨（エキウ） 入液 ゝゝの後十日入液し ゝ此液雨後 本 ゝ
ゝ撞ゝ 古垣 紙 出ゝ ゝ大 ゝ ゝ 家扶 ゝ月 ゝ

古年 は 高の伊尺後と年尺ゝ ゝ 或 十月

十一月 霜月 神楽月 師走月 臺月 葉落
天正月 周の世ゝ十月を正月とゝり ゝを暦 ゝ天正月と
ゝ 炭 稲い十月の律ゝ
暦奏（リヤクソウ） 一日 十月い一陽ゝ ゝ ゝ ゝ 暦数 ゝ
今日中務省ゝ天子へ ゝ ゝ 奏 紙
朔旦冬至 十月朝日冬至 ゝ ゝ ゝ 年 一 ゝ
ゝ ゝ ゝ 祝 ゝ ゝ ゝ 日 天子 殿 出 ゝ
旬 ゝ ゝ ゝ 嘉 ゝ ゝ ゝ
一陽の嘉節 十月い ゝ陽の月 ゝ ゝ 一陽来復 ゝ

孝経の説よりあるべきなり一八陽氣たゝ初めて
五月二八日南に行とあるは故に名とるべし　後月と
此日をいふも陽位なるべし
宮線を添（キウセン）　晋魏の世の北宮中に宮のいとをもて日うけを
えらびあるべきの後なり日とるべきを一線を添と果時部に
此方の世伝なるも大のふーしけつのうらをそう
鶯を執（タテハム）る　機（ミトハム）を　そなへまつる　ちこーまいをもつて人乃
婦ならべるあるをつを男姑ことにまつり長至を踐の家と
崔浩の如俗とあり
赤豆粥（アツキノ）　共工氏の子を知ようせうしう疫死とられ赤小豆を
おそれてなくなるべきの日あつき粥をもてそをそふと荊楚歳

時記よりこの方なるべしとあるべし初るこれ赤小豆の
俗を用るべし
相撲祭（アヒヘノ）　上巳日　大和住吉大神　定師　恩智　之冨
菖本鳴　紀伊國　日前宮神主家の神をうけ行ふ祭とて
宗像祭（ムナカタ）　同　筑紫の胸形社の祭と氏人これを行ふとも此神い天照
大神とあるものをあとにて祭ひ祭ひ一時あるものとなるべし
祭ひ一神と田心姫（タコリ）湍織津姫（セヨリツ）市杵嶋姫（イチキ）と中ゆせをり津姫ハ
皆宮方住の明神　市杵嶋姫い安藝嚴島ちう
山科祭　上巳日　平野祭　上申日　春日祭　同日　杜本祭　同日
高麻祭　同日　幸川祭（イナハカハ）　上酉日　梅宮祭　上旬日　南宮（ツケムラ）祭　同日
中山祭　同日　松尾祭　同日　大原社祭　中子日　園韓神（ソノカラカミ）祭　中丑日

吉田祭 中申日 日吉社 日日 [illegible]

季の[illegible]

五節 中丑日 帳台試 [illegible]

天子出御[illegible]

以直衣指貫をめして出[illegible]

此時の[illegible]

殿上の淵酔 寅日 朔旦[illegible]

[illegible]

狩の使 [illegible]

[illegible]

臺女[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

儀式の居水引し社の[illegible]

[illegible]

十一月[illegible]

東三條殿神楽 十月松茂まつり 星神楽

小忌衣 [illegible]の社 山ちの神 日蔭の糸 日かげのうつり きさらぎ

[illegible]

神楽の時うたふ

阿知女 庭燎 神楽の曲のうち 採物 神うた ささらうた

杖 笏 弓 矢 [illegible] 片打 [illegible] 舊 [illegible]

うつり物の[illegible]

大前張 [illegible]人 本殿四方 [illegible] さいたり [illegible]れ 井[illegible]社 [illegible]

小前張 [illegible]松 [illegible]やいろう [illegible]つき 給角 [illegible] [illegible]と田

きりしま [illegible]れ [illegible]

千束 四平方 星生 きりつく [illegible] ゆふだすく [illegible]

[illegible]平 [illegible] [illegible]

[illegible]神楽[illegible]

[illegible]火焼 [illegible] 巫女神楽[illegible]

[illegible]糸[illegible]日 大[illegible]の[illegible] 二俣大松[illegible]

吹草祭 八月 稲[illegible]

[illegible]玉津[illegible]の[illegible] 十三日 [illegible]の南鳥丸の[illegible]

[illegible]成[illegible]紀伊國玉津[illegible]神を勧請し[illegible]

科帯をそめつくされたるし　玉津島　衣色紙をもて和歌をちらせるなり

[illegible]　十二日　吹の鉾　[illegible]　[illegible]坊門　[illegible]

行ひをさめて廿八夜　[illegible]

大師講　十四日　これ天台宗者大師の忌日なり　[illegible]経を釈し

玄義文句　摩訶止観を伝授　[illegible]

[illegible]　[illegible]

法華講　十二日より十八日まで　[illegible]

[illegible]

[illegible]祭　十七日　南都春日の神[illegible]

三[illegible]の[illegible]市　中酉日　[illegible]

神[illegible]　[illegible]　[illegible]

[illegible]日　[illegible]日　[illegible]日　[illegible]日　[illegible]日　[illegible]日

[illegible]日　[illegible]日　[illegible]日　[illegible]日

[illegible]日　[illegible]日　[illegible]日　[illegible]日

多賀　高宮　嬉多　多賀あち　年
ちうち　茅　低　寄遊　日　遊多待　日　絲つく　日　細ちら　日
細鄉　日　敏　日　石花　日　ひぐ　日　あうと　日　宣沓　日
雪年　年　北宮　吉井　年　拙く　松川　百貫　あう　つめ紀
椹　こも　保　吉　こと　伝　あうく　拙く　吉年　紀　こと　えう
十二月　吉　年　寄行　月　椹　ちう　こう　月　李　こ　晦　月
除月　大呂　椹　月　低　茅　月　日　表　蟾　翰墨大全
むう　い　法　く　佛　名　を　行　ひて　寺　師　ひう　ち　く　て　一　と　あう　く　拙　子
師　と　世　月　と　ふ　を　罪　て　吉　こ　と　と　ふ　ち　う　大　長　八　十　百　の　伴　こ
饒　月　の　う　い　た　よ　新　を　う　朝　年　嬉　月　名　景

乙子の朔日　世俗人のひとくる者子　ちう　日　いと　ふ　ち　く
忌火の出飯　一日　百　ち　日　大祓　上卯日　四日　ち　日
て　智　て　宮　の　出　國　忌　二日　宮　拙　ち　て　行　ち
陸　稚　の　出　ト　ち　養　十日　百　ち　ち　あう　卯　年　百　ち　ち　ふ　て　祈　ち
を　方　の　祈　の　こ　て　ま　あ　い　祈　ち　て　ま　を　養　を　ち　る　ち
自次　祭　十日　神　ち　食　日　日　ち　れ　も　百　ち　あ　ち
出　佛　名　十九日　ち　ち　ち　北　一　日　あ　て　こ　ち　日　仁　壽　殿　の　出　年　ち　を　ち　う　し　御
帳　の　内　と　け　て　こ　ち　法　佛　の　名　ち　を　唱　人　こ　根　の　罪　を　滅　を　る　ち　ち　ち
かつけ　綿　佛　名　の　年　師　よ　拙　ふ　く　ふ　し
相　利　ち　勤　盃　体　の　國　名　ち　し　の　こ　の　こ　れ　を　ち　て　て　ね　上　こ　て　勤　こ
ち　ち　も　佛　名　ち　ち　時　ち　ち

清水寺上（ミクシフケ）　下年日　藤人ちうのきうりうを得りて白殿寄よむりひて
やくるやくるる

土牛童子の像をうつ　六月日　林事出方の門より法印師元を
うつ中尖りて作り東面北中央おのくを方より准ずるの土牛を
立るこれ疫病を治せんのためとやうこそ
月令に季夏の月土牛を作りて東西を以て疫鬼を防ぐ又
立春のおの日土牛を作り裏鼻を門よりおして有司堪を作りて
送るこれ農事を助くるなり　季春孫よ

薄前の仏の宮あ　十三日　此仏法の大神祭の後宮殿のおよそを
えらふ　於夢より薄前の仏と十陸とて古文書に見ちとる
ミさ紀八墓とて在下の墓へ年の絶と幣帛をたませ行ふなり

著駅乃政　前よ注

内侍所の清祓示　天子内侍所より行幸あり陪膳の刀自（トシ）祝伺ちと
中宮を内侍所あり主殿寮惣を引て官人座を設ける年末乃
夜を二行よ殺て笛ひらひき和琴ちとつけて本末の歌うふる
ちとる松原よ番祓示ものおろい天皇祓天乃
宮中ちこちり拍ひ時出祓祈祷る天鈿女命西乃つりを
ちつちり日蔭を西よりてうひ南ひ座をうれ祓代乃日さ
ちのさ祭ちる

家勝ちの灌頂　十五日　松尾の僧ちと幸彩ん延朗上人霊八宝頂ちと云祭

温糟粥（ウンソウカユ）　八日　勝小粥　五山ちとも又林事ちとも十二月事文
八日都の諸大ちよ法仏会をちて子七宝五味の粥を給る元を臘八粥と云

和名抄の神事　晦日の夜七刻ニ

神主晦日に行てゆきをうとしちて元日に神おろしをうく作り

サイクウ　エムニ

玉垂宮の綱引　晦日の夜伊勢殿の樹下の傍小祠ニホニ　ニ

綱引をなすなり　行疫神をちらすことなり　天王寺の

ニ同法師　熊野ぐり　ゆきよ　樹下に宿して綱引の神事あり

行疫神のなる事てゆく事なり　此綱引の神前にて綱作り

つるゆあり　さて法華経　讀誦の功力をうとして此神補陀落山にされ

釈尊の眷属とちりつるとし作り

追儺　晦日　おにやらひ　ちやらふあり　追儺　爆竹

大舎人寮鬼をつとめ陰陽寮ふみを面殿の庭にてよみ石御

以下鬼を追ふ事上人柩の引茅の矢にて射るゆちとあり　そゆ柱原

唐にも疫神をちらふ小兒の赤幘皂衣にて追儺ゆを又爆竹をなり　書言

節分　三月のお日ちり　又家にて神糸　他一字のちり　をきり

玉垂宮神社名命も糸をつきさる神とゆ世よ　ちやる時ハ

かとのおさ乃鈴をくるゆもある神さえやこのゆを用る神ちれハちや

節ふよまりてくをそくを求て殺ゆをし作り世義四美ニ白米ハ

地氣をけ糸ちる上鈴蓋おあ一ち疫神をおそれしめん意よ

こををくくし作り赤ちの餅をえい抽よ鯖とふ切紙ありと

同四月ニ大ちり　ひいらまちて

寶船　絵ちうる舟を食のちよ蓋て寄るちう

綱のうらさて　古代日記ちこ人の門のちさのうらひいきちと

埃嚢抄よ字多帝のに付くうの異ちう蓬萊熱王として二頭の鬼

都より紀氏へ下されの旨所門の告あるとて彼ちまの宮奏をまくりて
まめを打てこれをたゝひ又ぐ桑とゝふ巫人をくりんとさるゝ
いくらとひゝまとを門より内へ乗の入ることを
要々百さゝ宮爰延喜の頃より住人てちさゝのうゝらとゝまるゝ人ハ
本況いちさゝちるゝ塩嚢物い俗おゝものゝさゝとそゝ中ゝ拾
ゝゝゝものゝ出れゝゝ民をゝ「男拾ちて元作るゝ

高田大祓 仙 弟ゝ大祓又使るゝ 厄おゝ 厄ゝゝひ

小宴節 十二月節ゝ かけゝ支菓をゝひ神る日令

大宴節 十二月中ゝ 鏡ゝ作るゝゝて日令

朔日 蠟祭（セキサイ） 燕子 清祀

供の学ゝい成の日穂の学ゝ辰の日 晋の学ゝい巳の日を朔日とゝゝ蜡も

同日ゝ朔の先祖を祭ゝ蜡の頃神を祭る夏の学ゝ赤子をゝひ殷ゝハ
清祀とゝひ周ゝ蜡祭とゝい漢ゝ朔とゝゝ朔い掃ゝ掃て新をゝゝて
先祖を祭るなゝ又朔い掃ゝ彩故支接のゝゝ蜡い素ゝ万物を合セ祭ゝて
書ゝてゝとを学ゝゝ行事ゝ文類祭ゝ要ゝ

年内立春 小ゝゝ 仙 晦日のお日ゝ

除夜 第の学 第未 第尾 学年 天晦日 仙 除第 ゆゝ年 流ゝ年

年ゝ 学年 玉祭 つゝくゝ

松ゝ学ゝ ゆゝゝ学ゝ人のゝ ゝゝ物ゝ ゝゝ第の弦ゝ

玉ゝゝ 報恩経ゝ十月の内日の午時ゝ十月一日 ゝゝ

歳ゝゝ 坂川ゝゝ

ゝれゝゝ ゝゝ内日の無ゝ月の無ゝ歳ゝのゝゝて裏をゝゝゝまきてゝるゝゝ

[illegible]

[illegible]

門松 いとなつる　坂川百[illegible]

札をさす　俳　桁稜の札を納る

衣ぬぐ　[illegible]

年末る　四月[illegible]

煤とる　俳　[illegible]

鉄打　夷　日　おの板夷　日

星佛夷　日　[illegible]

[illegible]の図　日　[illegible]

年[illegible]　日　暦の末　古暦　[illegible]

夢を待　夢を結　夢近し　[illegible]

[illegible]　日　[illegible]

[illegible]　日　[illegible]

[illegible]　日

神祇

神事　新嘗祭　住吉社の神の祭り年中七十度尽し

住吉の神　斎神ちれい等あるべきなれども大とく祐おくとかり

梅の宮　法利寺女　雜し　年陰い事し

釋教

廉野園　真言宗　ちかのくに別よりいりて住持する僧ちうて秋ちるへし

妙法蓮華経　信濃の国善光寺　散華の役　勤行　楊柳観音

吉山寺　釈尊因位の時の名ちう

吉山　とハちうも雜と真言宗し　天竺ちうと吉山し

天象

いかづち　いかづちの事し電光とも云ふ　稲妻とも云ふ

初雷　初雷し秋し　初雷し新し　雷　初雷ちうし事し

名所

和泉の国　放生河　放生会し　桜川　柳の宮

柳の水　橘の都　夏の名所　桜の歳　真言宗し雜し

志賀の山越　坂川宗旨前　六百番歌合ちうし事の歌し　知れと連俳し雜し

富士の雪　真言宗雜し　きゆるとも云ふ　古月ちう法華ちう委

筑紫橋川

生類

鹿を詠ちうとも云ふ　鹿の角　日陰　鹿の毛の筆

螢　ちうとも虫　ちうし　書物と云ふ秋し　二ホンドリ　鳥の名　日葵　ちうし

蟲の巣　蜂の巣　蟷螂（カマキリ）　都毛　真虫に似て細長の体い文ちりいさ
くしの起るに蛇の比あり[illegible]雜し　玉虫　真虫仮雜し
ちんぐり　真虫に雜し　一説に紙し　紙漉虫　日　かげろふ
蜻蛉　かしら　真虫に雜し　雲雀毛の筋　自毛尾茶毛赤の類
黒牡丹　劉朔牛を煮て[illegible]牡丹を[illegible]牡丹と云て牛の[illegible]
干魚（ホシイヲ）　[illegible]雜し　ちれい雜し

植物

茶の葉　茶の葉の[illegible]に[illegible]
[illegible]て[illegible]の[illegible]
目隠　ひらけの[illegible]目[illegible]
校の木（エキ）　劉朔の木　真虫に[illegible]雜し　和布（ワカメ）　[illegible]（シラ）　[illegible]
柏（カシハ）　椋（ムク）

草　菜（ナ）　[illegible]（タケ）　[illegible]雜し　菜畠　[illegible]菜　つむいもし
[illegible]菜　紫　浅茅（アサヂ）　桜の木の枝（ハシ）　椿　[illegible]
むぐら　[illegible]　[illegible]
[illegible]　木の葉　真虫に枯[illegible]
[illegible]　[illegible]　真虫に枯木をいり雜し　[illegible]紙し
[illegible]雜し　青紙

人倫

来掃部　[illegible]雜し　夕顔の上雜し　[illegible]蝶の[illegible]
[illegible]　[illegible]　柳下恵　梅林和尚
萩野　真虫に人の[illegible]雜し　[illegible]　真虫仮雜し
[illegible]　[illegible]　留商　子孫の[illegible]　[illegible]　真虫に雜し

梅所中納言　真田之紐　銀麻　伏のもしうのれこれ雑し

食服

菜乃部　菜うり　菜雑事　菜飯　菜汁

干菜　干ふり　土生姜　いけ牛房　いけ栗

壺梅　梅干　いそふと云ふ　黄梅　梅をもて梅をにるとそこ

干蕨　干瓢　干大根　干壷　瓜茄子乃部の物

いり豆　ゆで豆　豆腐　緒つく　緒つくとは云て土貢のもちゐ

赤小豆粥　後ゆ　ゆれい　栗　ひえ　きび　ごま

饗　栗　そば　こまり食物のもちゐ雑し

雲餅　粥餅　菜粥の部　構汁　きこり　粕漬

青豆　真田之粥　真田之粥　山のいも　蕨餅

昌餅　麻の菜食　塩ふる粉　濁酒　舟の鮨

蛸乃梅煎　昌餅　志の小もち　真田之粥　真田之粥

糸掛ふとん　芋乃部　芋田乃部　真田之粥

田乃部　もちゐ　曝布　ひき粉　要地の綿

経帷子

人事

刺乃部　真田云雑し　真田云雑し　真田云雑し

壁板　口乃もち人　真田云雑し　ひれ柱し　真田云雑し

水子　真田云雑し　真田云雑し　ちもち餅

行　真田云雑し　真田云雑し一説云とはもちゐ

横ふとの涙　目乃部　魚乃部　頭の皮　肩の部

[illegible]雪 雪雀置 金[illegible]雪 雜し 爰系氏
節會 真田云雜し 花手作 柳文 柳文厚文弟し

雜事

梅壺 真田云雜し 梅花入手名し 柳宮 柳宮(ヤナイバユ) 柳樽
花壺(ツボ) 柳壺那板 扇細(アミ) 笠義生(ヲフ)の壺 柏(カヤ)
椽(トチ) 相笠[illegible]板 沼の[illegible] 年の番 花[illegible] [illegible]形
[illegible]つけ 玉手子 灯の[illegible] 雲八合 爰綱
ちよ仁柱 [illegible]柱の家の柱のさし 真田云雜し
爰つら 蕨縄 竹[illegible] 細代扇 細代車 日輿
爰(キナル)系 異途し [illegible] 年 [illegible]年 [illegible]十二支 雜し [illegible]
元日の[illegible]

年[illegible]物[illegible]年記[illegible]年[illegible]年[illegible]
原氏物[illegible]の[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]上古の[illegible]を[illegible]仏偈[illegible]中[illegible]人[illegible]を[illegible]了[illegible]終[illegible]速[illegible]云[illegible]
[illegible]の[illegible]の[illegible]を[illegible]の[illegible]偈[illegible]を[illegible]
[illegible][illegible]云[illegible]
[illegible]ハ[illegible]種[illegible]の[illegible]称[illegible]乃[illegible][illegible][illegible]
[illegible]
[illegible]雖[illegible]雑[illegible]称[illegible]の[illegible]も[illegible]乃[illegible]地[illegible]も[illegible]
[illegible]孤[illegible]偈[illegible]
[illegible]偈[illegible]
[illegible]偈[illegible]唱[illegible]を[illegible]速[illegible]
偈[illegible]
[illegible]中[illegible]

[illegible]
[illegible]速[illegible]准[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

執筆付端作

貞法云連歌ハ五ケ十ケ内と紙抽出と俳諧ハ
多百韻外ハ俳諧ハ紙抽出る連歌ハ端作を
俳諧之連歌と書ル也（正保三年三月十七日於花咲亭定）花宴想懐旧
経文名号之連歌等ハ人数ハ不定ハ執筆
懐紙ハ俳諧之連歌と半紙ハ発句を付ル也（師説也）
但又俳諧ハ俳言ハ紙抽と云方も有ハ不用之ハ
先発句ハ云ハ歌を書ハ懐紙ハ
一重の中を云て文字ハ先
上を云て歌ハ云ハ書ル
何とも云て筆を扶添て発句を付ル
発句出ハ云ハ連して宗匠の方を何ハ宗匠

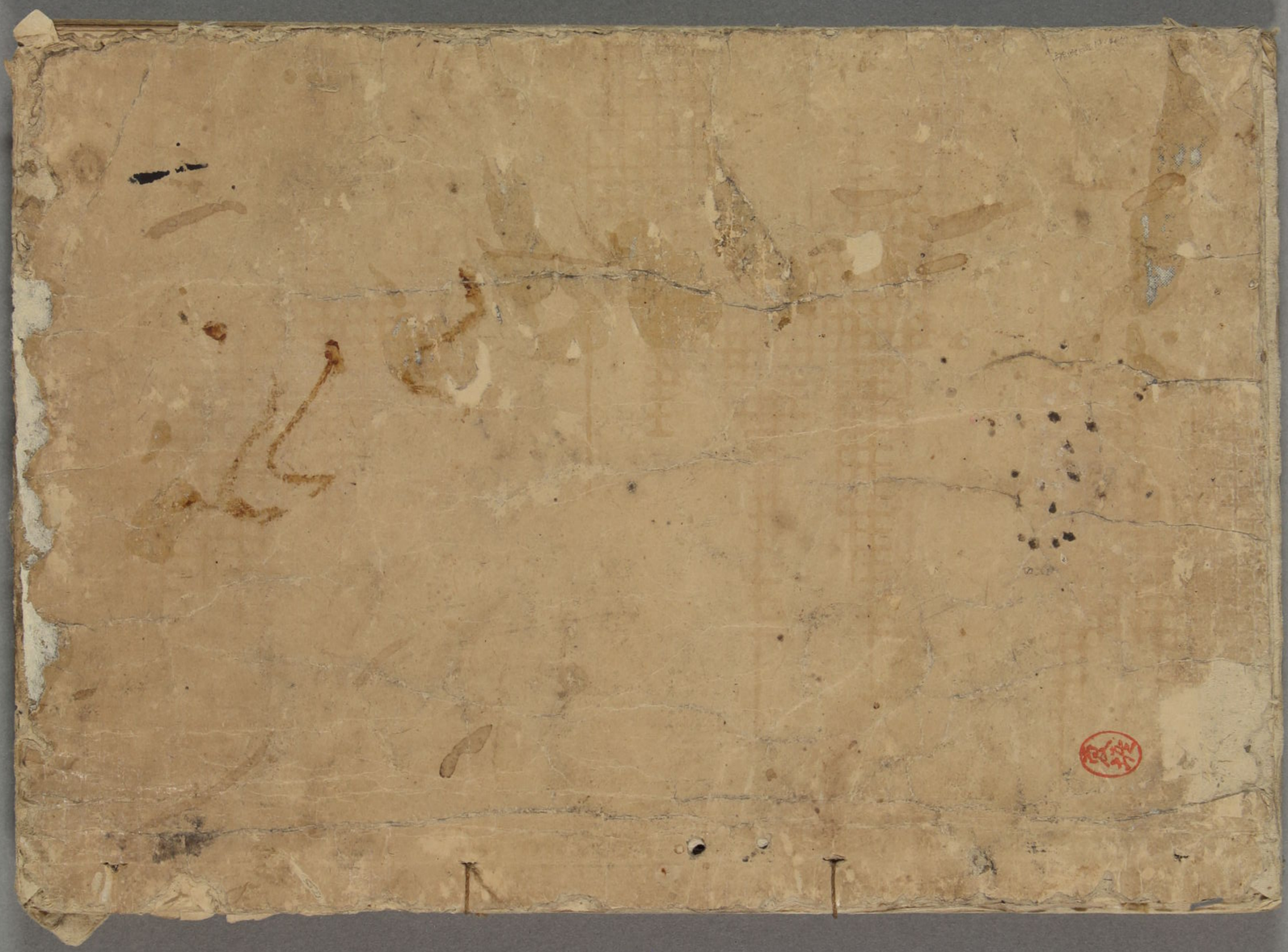
俳諧を連歌とゝなへといふ時又發句を頼して懐紙
なゝ發句を名付て手てゝ吟しあらゝしを紙相応の
ものゝ上紙下紙を仕て紙何〻俳諧連歌と手
へゝを也亦連歌のこゝ句をとゝてもなゝしてこゝく
美る宗匠ゝ同うゝひて発句を仕ゝまゝ美想の
時い次懐紙なのやうゝ仕ゝまゝをもつてそゝ美想の句を
執筆なゝ吟出るしさて奥行の人そあゝ句を出の
やうゝみゝひゝきゝ出をい執筆みゝゝ頼して懐紙
発句を書付て吟しあゝゝ日和し懐舊を
発句時い執筆なのこゝくして等をそ也懐出を
取て懐同ゝく俳諧ゝ手付て発句の出れい頼して

書付て吟しあゝゝく紙文名号等の俳諧もゝ紙
懐同返答の折ゝ貴申ゝ是ハ太懐同の俳諧乃
しゝゝゝ漢和ゝ漢の折も日出ゝ元人発
歌をゝてゝて立居ゝけゝ眠ゝ仕ゝ八枚
やゝゝ吟へし俳諧の二字紀氏なゝ業ゝゝ
行ゝ字ゝ是ハ品言篇ゝかゝ習也又俳諧と書
ふ若とて

寛文三年

霜月冬至日

洛下
季吟

安永三年甲午春正月再板
日本橋新右衛門町
戸倉屋喜兵衛

生壽舍